

市民の意見

発行：市民の意見30の会・東京

NO.120
2010/6/1



発行者の住所：〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-29-12-305 TEL:03-3423-0185 FAX:03-3402-3218
 郵便振替：00120-9-359506 eメール：iken30@mwb.biglobe.ne.jp ホームページ：http://www.1jca.apc.org/iken30
 * 隔月刊/購読料・送料とも年2500円、一部400円、65歳以上および身障者の方は年2000円 グリーン会員の方は年1000円

藤川武男 「あじさい」

（無言館所蔵 作者の経歴は33ページ）



武男は絵だけではなく、絵本や図案、歌作にも才をしめした。美校を卒業後、講談社でデザインや挿し絵を担当、そして結婚……。妻・フクの手をかりて雑誌「手芸と洋裁」を刊行、歌集『漢音』を上梓した頃が、武男の最も充実した青春の日々ではなかったか。しかし、結婚の翌年に長女が生まれ、まもなく出征、その三カ月後には長男が誕生する。

「赤ん坊は丈夫に育っているか。どうかしっかりした子になるように」フクへの手紙に子への思いがこぼれている。それはなかった。昭和二十年秋、すでに戦争が終わったことを知りながら武男は死んだ。

（窪島誠一郎『無言館の詩 戦没画学生「祈りの絵」第三集』講談社より）

市民の意見 120号 目次

○巻頭詩 「最後に」

榊美智子 2

○特集1 日米安保を問い直す

沖繩の心を国民の意思に

伊藤千尋 3

基地の町 立川・砂川から見た安保

加藤克子 6

○特集2 市民と政治と鳩山政権

政治参加の（間接妨害）をなくそう

栗田隆子 8

地方政治の現場から見た鳩山政権

須黒奈緒 10

○インタビュー 国際協力NGO「JEN」

他人のためなら頑張れる

木山啓子 12

○運動の現場から

高校無償化と朝鮮学校

越田清和 16

6・19集会「もうやめよう！日米安保条約」

北野 誉 18

すさまじい社会から

荒井康裕 19

4・25 沖繩は黄色い意思表示

大木晴子 20

完成 DVD「どうする安保」

小林アツシ 21

○文化

新連載 反戦交友録「古屋能子さん」

吉川勇一 22

連載エッセイ⑦脆さの強さ

鈴木一誌 23

本の紹介 「他策ナカリシラ信ゼムト欲ス」

天野恵一 24

映画の紹介「ハーツ・アンド・マインズ」

本野義雄 26

マンガ ふしぎの国のありか②

まっただえこ 33

○その他

「池澤夏樹・吉川勇一講演会」のご案内

有馬保彦 15

読者懇談会の報告

有馬保彦 27

【資料】「普天間基地問題についての第二の声明」

市民意見広告運動／ニュースのCD-ROM化

28

事務局だより

吉川勇一 32

6月読者懇談会のお知らせ

読者のおたより 30

インフォメーション

33 会計報告 35 編集後記 36

カット 村雲 司

◆題字 安西賢誠

◆6月の読者懇談会のご案内◆

☆ 6月の読者懇談会のご案内 ☆

・テーマ：DVD「どうする安保」上映 小林アツシさんのお話
 日時：2010年6月25日（金）午後6時半 場所：ピープルス・プラン研究所（東京都文京区） 参加費：500円
 ※詳しくはP.29の案内をご参照下さい。

最後に

樺 美智子

だれかが私を笑っている
こつちでも向こうでも
私をあざ笑っている
でもかまわないさ
私は自分の道を行く

笑っている連中もやはり
各々の道を行くだろう
よく云うじゃないか
「最後に笑うものが
最も良く笑うものだ」と

でも私は
いつまでも笑わないだろう
いつまでも笑えないだろう
それでいいのだ

ただ許されるものなら
最後に
人知れずほほえみたいものだ

(樺美智子遺稿集「人しれず微笑まん」)

●作者プロフィール

かんば・みちこ 1937年11月8日東京都生まれ。1957年
東京大学文科入学。同大文学部学友会副委員長として安保闘争に参加。
1960年6月15日の安保反対国会デモ中、国会南通用門にて警官隊と
激突して死亡。享年22歳。

特集1 日米安保を 問い直す

「日米安保改定50年」の今、日本政府はこれからも米軍に基地を「提供」し続けるのか、「海兵隊」はなぜ必要なのか。
「日米安保」を私たちの手で変えるにはどのようにすべきか、その端緒を探ります。

沖縄の心を国民の意思に

伊藤 千尋



がよそ者扱いなのである。

この3年、毎年沖縄に行っている。沖縄の上空に達するはるか前に、飛行機は異常な低空飛行に入る。海の上空わずか300メートル以下だ。

飛行機にとって安全なのは高度1万メートルで飛ぶことだ。しかし、沖縄近辺の上空は米軍の占有空域で、民間機は300メートルより高いところを飛べない。日本の空であって、日本のものではないのだ。

操縦士も大変だが、乗客も怖い。機内から話し声が失せる。こんなに低空を飛び続けて大丈夫なのかと、みんな心配なのだ。

空だけではない。沖縄に着いて那覇から北を目指すには高速の沖縄自動車道を走るが、道の両側には金網が張られている。その向こうは基地だ。金網の上部には道の内側に向かって鉄柵が伸びる。市民が基地に入れないようにしているのだ。この島では空も陸も日本人

自動車道は普天間基地さらに嘉手納基地と続く。基地のそばには学校や住宅地がある。

基地と一般の住宅がこれほど密着しているのは、世界でもあまり例がない。嘉手納の飛行場ではF16戦闘機2機が轟音を上げて飛び立った。私が訪れたのは土曜だったが、平日は3分おきに戦闘機が離陸するという。そのたびに住宅地にも学校にも、耳をつんざくような音がとどろく。

基地の中には空中警戒管制機、空中給油機など計100機が常駐している。最新型の黒いF22型戦闘機も見える。1機180億円もする金食い虫だ。

さらに北上すると辺野古だ。浜辺に鉄条網が張られている。その先は弾薬庫だ。鉄条網には市民の手で「NO BASE」などと書かれた赤や黄色のリボンがつけられていた。基地に反対する住民たちは小屋を建てて座り込んでいた。

■世界に広がる9条の精神

再び南下し西に走ると読谷村だ。太平洋戦争末期の沖縄戦のさい、沖縄本島最初の米軍上陸地となった地である。この村だけで3700人以上が亡くなった。

村の役場のすぐ側に運動公園がある。4月25日に普天間飛行場の早期閉鎖を求める県民大会が開かれた場所だ。その日、9万人の市民が集まった。女子高校生2人が壇上で「ここは日本なのか。みんな基地は仕方ないとあきらめていないか。考え直そう」と訴えた。

この公園の一角に「人類の未来は常に明るいものでなければならぬ」と刻んだ「不戦の誓い」の石碑が立つ。二度と戦争を起こさせないという決意を表明した「不戦宣言」の碑もある。

読谷村役場の玄関のそばには日本国憲法第9条を記した記念碑が立っていた。柱の上に炎が燃えさかる彫刻があり、柱に9条の条文が掲げられている。なぜ、それが建てられたのか。私は役場に入って聞いた。

9条の碑も、不戦宣言の碑も、沖縄戦の終結50周年を記念して1995年に建てられたという。当時の文書にはこう書かれている。「世



キャンブ・シュワブ正門前の座り込み (2010年4月)

界中が九条の精神で満ちることを信じよう」

日本でさえ自衛隊がこれだけ肥大化して9条が実現されていないのだから世界中が9条の精神で満ちるなんて信じられない、と言われるかもしれない。だが、9条は事実として世界に広がっている。

アフリカ沖にあるカナリア諸島には日本国憲法9条の記念碑がある。グラン・カナリア島のテルデ市の「ヒロシマ・ナガサキ広場」の中だ。白いタイルに青くスペイン語で日本国憲法9条が書かれている。

碑ができたのは1996年だ。テルデ市と空港を結ぶバス道路を作ろうとしたときにできた空き地を、「市民が平和を考える広場にし

よう」と当時の市長が考えた。

大西洋の島にも9条の碑があるのなら、私たちの知らない地球上の別の場所にもあるのではないか。私たちは9条が日本人だけのものと思っているが、今や9条は平和を願う世界の人のものになった。碑を見つめながら、私はそう思った。

■米軍基地は世界から消えつつある

20世紀は戦争の世紀だったというが、その後半には平和への努力が進んだ。ベルリンの壁が崩壊しソ連が消滅し、冷戦が終わってからは急速に平和に向かっている。沖縄の基地をどこに移すかが問題になったが、実は世界から基地が消えているのだ。

米軍のアジアにおける最大の基地だったフィリピンのクラーク空軍基地は1991年に、スービック海軍基地は92年に、いずれもなくなった。きっかけは91年の火山の噴火だ。逃げようとした人々に対して基地は門を閉ざした。これが問題になった。「米軍基地はフィリピン人の命を守るためにある」と説明されていたが、現実には守らなかつた。だれのために基地はあるのか、と根本的なことが問われたのだ。

アメリカとフィリピンには日米安保条約に似た安保条約が結ばれており、10年ごとに見直



すことになっていった。ちょうどそのときに条約の更改期で、国民の命を守らない基地はいらないと国会は基地返還を決議した。その結果、1年後に基地がなくなったのだ。このとき、基地をどこに移すかをフィリピン側が議論したわけではない。「いらない」と言うだけだった。ただ一つ問題となったのは基地労働者の生活だ。当時、4万2千人が働いていた。その家族を含めると30万人が基地で暮らしていた。基地に隣接するオロンゴポ市のNPOの提案で基地の跡地利用の計画が決まり、それに沿って開発を進めた。5年後に私が現地に行くと、海外からの企業が入り農業利用も進み、かつて基地だった場所で6万7千人が働いていた。基地当時の1.5倍だ。軍事でなく平和な仕事に就けて、労働者は喜んでいった。

基地はアメリカ本土からも消えている。サンフランシスコにあった米陸軍最大の基地フォートメイソンが廃止されたのは、沖縄が日本に復帰した1972年だ。2000年間も使われた基地で、太平洋戦争のさいは150万の米兵を対日戦争に送った。市民の案をもとに1977年、基地は市民活動センターとして生まれ変わった。

建物は安い費用で市民団体に貸された。いま行くと、かつての将校の部屋がNPOの事務所となっている。埠頭のかまぼこ型の倉庫は、劇場となった。週末になると市民の劇団や楽団が舞台

で上演する。イベントは年間1万5千件に達し、参加する市民は180万人になる。市内にサンフランシスコ・ジャイアンツの本拠地の球場があるが、そこよりも来る市民の数が多し。センターの運営も市民が行っている。

■手を取り合う中南米諸国

かつて「カリブ海の沖繩」と呼ばれたアメリカの自治州プエルトリコのビエケス島の基地も、2003年に返還された。1941年から島の3分の2が米海軍基地となり、ナパーム弾、枯れ葉剤、劣化ウラン弾など新兵器の発射実験が行われた「基地の島」だ。

島民には白血病や「ミナマタ病」、ガンの発生率が異常に高かった。1999年に誤爆で島民1人が死亡したのを機に島民による返還運動が盛り上がり、わずか4年で基地は米本土へ移ったのだ。

南米エクアドルでも2009年11月、米軍基地が撤去された。対米従属からの脱却を掲げて07年に発足したコレア政権は08年、基地協定を延長しないと米国に通告した。さらに国民投票により、外国軍の基地の設置を禁止する新憲法が承認されたのだ。

基地撤去の運動をした市民によると、まず基地の実態を知らせるプロモーション



4.25 集会で

ン・ビデオをつくって広めることから始めたという。軽やかな音楽に乗って軽やかに主張する点が、日本の運動と違う。

運動の中心になった団体の一つに「オリガミスタ」がある。スペイン語で「折り紙をする人」という意味だ。彼らは日本人から習った折り紙に独自の工夫をこらした。折り紙を初めて見る人に、白血病で亡くなる直前まで千羽鶴を折った広島の少女「サダコ」の物語を語りながら鶴を折ってみせる。日本発祥の伝統文化を、平和を広める運動につなげているのだ。

中南米はかつて「アメリカの裏庭」と呼ばれ、政治も経済も米国一辺倒だった。今や、米国と距離を置き独自の国造りを進めるようになっていった。それが可能になったのは、これまで対立していた南米諸国が手を取り合うようになったからだ。経済での結びつきを強め、米国に頼らなくても仲間同士でやっていくようにした。欧州共同体のような組織を南米につくったのだ。

アジアで言うなら、日本と中国や韓国あるいは北朝鮮、台湾、ベトナムまでも含んだ共同体をつくったようなものである。そんなことは無理だと言うかもしれないが、南米諸国同士のかつての対立はもつとすさまじかった。中南米の小国コスタリカは日本と同じく平和憲法を持っている。しかし、日本と違って

本場に軍隊をなくした。周囲の3つの国が内戦をしていた時代、この国のアリアス大統領は対話を説いて戦争を終わらせ、1987年度ノーベル平和賞を受賞した。

沖繩・読谷村の沖繩戦終結50周年の記念誌のあとがきに、アリアス氏の発言が出てくる。「最も良い防衛手段は、防衛手段を持たないことだ」という言葉だ。

このあとがきでは日米安保の見直しを主張した。結論で言う。「われわれが欲しているのは、平和憲法と人間尊重を基調とする新たな外交政策であり、憲法第9条の示した非軍事国家なのである」と。

「基地はいらない」という声は、沖繩から徳島の島に広がった。今こそ、その理念を日本全国に広げるときだ。

いとう・ちひろ 1949年山口県生まれ。74年朝日新聞に入社し、東京本社外報部を経て、サンパウロ支局長、バルセロナ支局長、ロサンゼルス支局長など中南米、欧州、米国外派員を歴任。現在、「be」編集部員。ほかに「コスタリカ平和の会」共同代表。著書に「二人の声が世界を変えた」（新日本出版社）、「反米大陸」（集英社）、「活憲の時代—コスタリカから9条へ」（シネフロント社）、「君の星は輝いているか—世界を駆ける特派員の映画ルポ」（同）、「世界一周、元気な市民力」（大月書店）、「観光コースでないベトナム」（高文研）、「たまたかう新聞「ハンギョレ」の12年」（岩波書店）、「太陽の汗、月の涙」（すずさわ書店）など。

（写真提供 大木 晴子）

基地の街 立川・砂川から見た安保

加藤 克子



1 『基地日本』から遠く離れて

今年の立川憲法集會は、沖繩から高里鈴代さんを招いた。高里さんは講演の冒頭、「沖繩と本土の間には暗くて深い溝がある」という言葉を投げかけた。かつて全国の問題として認識され『基地日本』と表現された基地問題が、今では『基地沖繩』という表現がびったりくる現実を高里さんは突いたのだと思う。「沖繩

本」の一角を担っていた。朝鮮の戦場から帰休米兵が持ちかえる戦場の雰囲気や町を包み、多いときは5千人におよぶ若い女性たちの売春が彼らの落とすドルを吸収し、基地経済を潤していた。いまその記憶はほとんど忘れ去られている。

沖繩返還の年、立川に自衛隊がやってきた。やがて米軍は横田基地に集約化されていった。米軍基地跡地はほぼ3分割され、西が昭和天皇在位50年を記念する「昭和記念公園」になった。有事の際、ここに全国から兵員・物資が集まってくる予定だ。東が自衛隊立川基地を中心とした「広域防災基地」になった。有事の際、首都機能を代替える主要な拠点になる。残りの「保留地」と呼ばれる地域には、続々と自治大学校、裁判所、拘留所、各種研究機関など国の施設が建設された。わずかに残った保留地に地元立川市の給食センターなどが建設される予定だ。

2 自衛隊基地を通して見る日米安保

72年、自衛隊を迎えた立川は、一種の戸惑いを感じていた。「基地拡張は阻止され、砂川闘争は勝利のうちに終わった」という認識が

砂川の反対同盟でも一般的だった。それでも自衛隊を迎えた基地ゲート前の抗議行動には、数々の裁判を担い続けた副行動隊長の宮岡政雄さんが、白い鳩を染め抜いた反対同盟の赤旗を持ってかけつけていた。他国の軍隊による占領と支配が終わり、自国の軍隊が進駐してくる—日本の軍隊—自衛隊を実際に目の前にして感じたたじろぎは、まるで身の内に親戚の若者を抱え込んだ感覚、とでも表現すべきだろうか？ テント村の闘いはここから始まった。

私たちは小西誠三曹の「アンチアンボ」にならって自衛官にむけた反軍放送やビラ配りを始めた。テント村の小屋が放火で焼失した数ヵ月後には基地正門前で宣伝カーからの反軍放送を再開し、最初の放送特集は「沖繩問題」だった。基地の監視、反基地・反戦のデモや情宣を継続すること、その一方で自国の軍隊に対する闘いの思想を深めることが私たちの基本的な活動になっていった。以後38年間、曲がりなりにもテント村の活動が継続できているのは、軍事基地・自衛隊・日米安保という巨大な存在が相手であったこと、そして立川基地北側に歴史的な砂川闘争の地があったことと無関係ではない。

重要な側面を3点紹介しよう。

(1) 「むかし国防 いま防災」

古くなったこの標語は、防災イデオロギ―



定例駅頭情宣のあと、立川基地に申し入れ

返還」から始まった在日米軍基地の沖繩への集約化は、いま「普天間の移設先は沖繩しかない」という鳩山発言で、究極のところまで煮詰まっている。

かつて立川は『基地日

に対抗して私たちが掲げたものだ。70・80年代、自衛隊は「防災」を通して国民の認知を得るのにやっきだった。立川基地の再編も「広域防災基地」の名目で実現した。全国的に防災訓練が盛んになり、動員された人々は一カ所に集められて管理される客体になった。「有事に備える平時か、戦争をしないで済む平時の平和努力か」——私たちの主張はここにあった。現在では、自然災害も戦争も一緒にくたにして有事という考え方が一般化している。「国民の安全・安心」とさえいえば、人々は容易に動員される。それは「日米安保の抑止力」への信仰と同質のものだと思う。

(2) 「私たちは天皇なんかいらぬ」

83年秋、昭和記念公園の開園式典に天皇が出席することになり、立川は8千人の機動隊員が警備する戒厳状態になった。市内すべての公園が警視庁に押さえられ使用不能になった。私たちは天皇・天皇后制がいかに日本社会のあり方を規定しているかを実感した。こうした中で生まれたのが「アジアの人々と世界の人々とつながるために 私たちは天皇なんかいらぬ」というスローガンだった。

自衛隊イラク派兵の頃、テント村は反戦ビラ弾圧を受けた。公安警察が自衛隊情報保全隊に渡した資料には、テント村が反天皇制団体であることが明記されていた。民主的天皇などありえない。天皇制は日本社会の極権の

一つであり、日米安保とともに車の両輪のようにこの国に生きる人々を容易に判断停止に追い込んでいたのである。

(3) 「平和な砂川をとりもどす」ために

砂川では、虫食い状態の旧拡張予定地の自主耕作や野球場作りが始まっていた。地元の人々が左右の別なく始めたことで、生きていくための生活の智慧だった。私たちも、遅ればせながら70年代末に自主耕作を始めた。木を植え、ひろばを作り、春には反基地駅伝、秋には秋まつりを開催し、自然の営みにせか



子どもたちにはらっぱを！砂川秋まつり（砂川旧拡張予定地）

されてせつせと畑に通う——「砂川」は私たちに欠かせないものになっていった。

無機質な軍事基地とは対照的な砂川の今は、まさに砂川闘争が獲得したものである。私たちはときに沖縄から、韓国から、パレスチナから客を迎えて案内をする。彼らの伝えるかの地での闘い、そして砂川を見た感想に、砂川が世界とつながっていることを実感する。平和な砂川をとりもどすことは、今を生きる私たち共通の課題だと思う。

3 基地・安保の現場を掘り起こそう

5月3日、高里鈴代さんは集会前に立川基地——砂川——横田めぐりをした。「緑あふれる春の砂川」が印象に残ったという。基地をとりもどしたあとの町づくりは？という関心をもって高里さんは砂川を心に刻んだという。

だがこの地が、将来「開発」の名で地名さえ消し去られる可能性を持つ危うい存在であることを、私たちは知っている。全国には無数の「基地・安保」の現場が埋もれている。記録と人々の記憶、そして現場の一つ一つを掘り起こすことが大切だ。その豊穡な内容はきつとこれからの闘いの武器になるだろう。日米安保も、日米軍事再編も、自衛隊も、そして天皇制も、巨大な存在である。それらと闘うことを通して私たちの安心立命を得たい。（かとう・かつこ、立川自衛隊監視テント村／市民のひろば・憲法の会）

生活と政治の諸相

政治参加の《間接妨害》をなくそう

栗田 隆子



投票という名ばかりの政治参加

投票に行きましよう——こんなポスターを見るといつもなんだか不思議に思う。「権利」がいつのまにか「ゴミを拾いましょう」みたいな「道徳」になっていっているだろう、と。だからそれこそゴミ拾いを「えらいね」などと言われるように、選挙に行くこと「えらいね」と言われてしまう。

これって日本だけの特徴なのか。と思って調べてみるとどうもそうでもないらしい。たとえば「義務投票制」という制度。Wikipediaによれば（もちろんここに掲載されている情報が正確ではないこともあるので注意！）ウルゲアイ・キプロス・オーストラリア・シンガポール・スイス・ナウル・フィジー・ベルギーは選挙に行かなければ「罰則」があるのだという。ここで挙げた国々は罰則規定が厳密な国のみで、罰則規定のない国を挙げればもつと増える。世界的にもどうも選挙というものは、「われもわれも！」と行うものではないようだ。人権という意識に基づいた選挙権を巡る権力との闘いというのはそれこそ100年単位で行わ

れてきたものはずなのに、気がつけば選挙は納税みたいな義務となっている。とつても不思議だ。誰かこの不思議さを考えたことがないのだろうか。どうも投票の話になると「投票に行くべき」という意見か「投票なんて無意味さ」という意見になる。

私は若年労働の問題、とりわけ女性の労働問題や貧困の問題について公の場で語る機会がある。「フリーターズフリー」という雑誌を通してこれらの問題に関わっていると語った時、妙に責めるような口調でこう言われたことがある。

「やはり政治に関わる必要があると思うんです。議員に立候補をするとか、議員を立てるとか、そういうことを考えたことはないのですか？」

そのときとつさにこう答えた。

「もちろん議会政治に参加することも一つの方法ですが、政治といってもいろいろな側面があると思うんです。労働問題を〈伝える〉ということとは政治活動の側面があるはずす」ちなみにそのような受け答えを聞いていた旧友が、若干皮肉気に「あなたもスマートに

なっちゃったものね」と話してくれた。昔の私だったら「じゃあ、あなたがやれ！」くらいいうでしょう、と。そして「ああいうひとは自分では、やれないのかやらないのか、ともかく、あなたにヘンな期待をしているんじゃないの？」と。

デモ申請をして思ったこと

政治というものがいつのまにか、「投票する人・される人」に分かれている。そして投票する人は政治に「期待」をし、投票される人は「期待を一身に受け」て、議会で発言をするという構図。

・・・でも、そういうものなのか？政治って逆には政治家以外の「善良な市民」は「投票」以外「政治的活動」は奨励されていないのではないかと、最近疑問に感じるようになった。投票という枠にむしろ政治的活動が押し込められているのじゃあ、政治に魅力がなくなつて当たり前だろう。投票行為は政治参加を国家が認めるアライバイみたいなものなのだ。

実際「投票」以外の政治活動的なものは、少なくともこの国ではあんまり奨励されていない。これは多分他の国以上かもしれない。

先日、私は始めてデモ申請というものを行ったが、まずこのデモ申請は警察に届けなければいけない。ひどく違和感がある。「集会・結社の自由」というのが憲法で保障されているというのに、その申請をする場所が「警察」

なのだ。これだけでもずいぶんデモ申請のハードルが高いような気がする。警察が管轄している理由は、建前上はデモをする人の安全と交通秩序を守るため、だ。しかしそれならば単純にデモのとき歩く時間だけ聞けばよいのに、デモの目的や、理由までしつこく聞かれる。デモの前に集会をやればそれも届け出なければならぬのだから、警備上の理由なんかじゃ絶対にならないのである。いったい何を守っているのやら。そもそも「俺が守っているつもり」なんていう人間こそが、却ってその守っているつもりはよくありそうだ。そして申請時に慣れ慣れしく警察官(7)に肩なんかたたかれる。女性メーデーの申請中に、である。だからこそデモをやってやろうという確信は深まったわけだが。

さらに、デモの出発地点・解散地点まできちんと確保をしなければならない。この「確保」というのはデモの出発や解散は公園が多いので、これを予約しなければいけないということだ。公園管理は警察ではなく役所の管轄である。そしてこの一連の作業は平日の昼間に行わなければならない。まったくメーデーのデモをやるのに「マトモに仕事していたらデモなんて出来ない」のだ。それだけではない。たとえば各省庁で行われている審議会や研究会等、法案を作る際に重要な位置を占める会議は、実は国民の傍聴が可能なものが多

い。しかしその事実もほとんど知らされていない。HPに載っているといっても、その情報がどこにあるかを知るにはそれなりのネットワークに入っていないと分からないことが多い。そしてどうせ知らされても、平日の昼間にやることが多いので、たいていの仕事をしている人は参加できないのだ。

こういう事実は、民衆の政治参加の間接妨害なのではないか。つまり政治参加禁止、という法律はない。しかし手続きの煩雑さ、政治参加にまつわる情報の確な提供がないゆえに、間接的に妨害されている気持ちになっ

もつと身近な政治参加の道

そして肝心の投票だって、単純に「日本国民」だからといって投票できるとは限らない。転々と居場所を変えている人で、住民票が住んでいるところからは遠いところであれば選挙に行くことは事実上適わない。そもそも路上で生活していれば住民票そのものさえ喪失している人が多い。そして住民票がなければ事実上投票は不可能なのである。いわゆる「投票」出来る人は、やはり「選ばれた人」だ。外国人の投票権というものに強固に反対する人が一部存在しているが、こういう「間接妨害」をする日本政府の意図を、さらにさらに従順に感じている人達なのかなあと思う。政治は誰も参加できるものではないと主張して

るのは、一部の極右だけではないのだ。

現状の党派中心の議会政治そのものの限界を訴える人もいると思う。しかしその前にこれほどのみみっちい間接妨害がある、ということも私達が政治を遠く感じる一つの大きな原因なのだと思う。政治に参加するのは意見表明の一つの形である。それが極端に狭められているのはなんともおかしい。

ちなみに私は選挙に棄権をしたことは一度もないが、私の入れた人はたいてい落選である。そんなことを話したらある人に、「じゃあ、自分が応援する人を立候補させてマイ議員を作ったら」と言われた。それも悪くはないが、議員と関わる前に、もつと政治的に意見表明できる場や、情報を知るネットワークを作りたい。「政治が怖い」という印象を与えるのが権力者にとって一番都合がよいことなのだろうから。

(くりた・りゅうこ、女性と貧困ネットワーク 有限責任事業組合「フリーターズフリー」組合員)



地方政治の現場から見た鳩山政権

須黒 奈緒



ビジョンなき鳩山政権

鳩山政権が誕生して8カ月が経過した。発足当初70%近くあった内閣支持率は、今年4月末には20%台まで低下している。

戦後60年以上にわたり自民政権が積み重ねてきた政治構造の歪みの矯正を新政権に求めるのであれば、たった数カ月間で評価を下すのは酷とも思えるが、一方で、多くの有権者が「政権交代」に期待した「新しい政治」が、建前だけのものになりつつあることが明らかにになり、落胆と怒りが広がっていることも事実だ。

しかし、新政権が今、真に問われていることは、個別の政策課題以前に、これから日本がどんな社会をめざして進んでいくのか、という総合的・長期的ビジョンが欠如していることだろう。

本気で持続可能な経済社会をめざすのであれば、50年先、100年先を見通した社会構想と抜本的な改革が必要だが、今の鳩山政権にはそれが見えない。従来の政権と同様の「経済成長ありき」の社会は、既に限界にきている。

現に、鳩山内閣も一部の既得権益に振り回され、次の国政選挙をにらんだ目先の予測しか立てられていない。そのことが、個別政策に様々な矛盾を生んでいることを自覚してほしい。

矛盾に満ちた環境政策

3月に閣議決定された地球温暖化対策基本法案は、「経済の成長との調和」が事実上の前提条件となっているため、温暖化対策を骨抜きにしている。

国内排出量取引制度の総量規制や導入時期が明確になっていないこと、全量の固定価格買取制度の導入が明記されていないことなど、民主党のマニフェストからも大幅に後退している。

また、他国に「実効性の確保」を要求しておきながら、自国は「他の国々の約束が出揃ってからでないと実行しない」とする立場は、国際社会に対する極めて不誠実な姿勢と言わなければならない。

そして、私が特に危機感を募らせているのは「再生可能エネルギー」の定義も曖昧にして、

原発の推進を明記していることだ。原発の日常的な放射能汚染や重大事故の危険性を考えれば、将来への責任を認識し、原発は縮小させていくべきだ。

原発への依存は、CO₂排出を増大させる電力供給構造を固定化・拡大する。さらに、莫大な建設費用は省エネ技術開発や再生可能エネルギー推進のための資金を吸い上げ、全体としての温暖化対策をも停滞させてしまう。原発は危険であるばかりでなく温暖化対策にとって逆効果であり、原発に頼らないエネルギーシフトが必要だ。

その一方で、鳩山政権は今年6月から高速道路の無料化を開始する。車の所有台数が減少している今日、公共交通から車への移行が再び促進されれば、CO₂の発生に影響を及ぼすだけでなく、大型道路への需要も高まり、無駄な公共事業が増加するのではと危惧している。

昨年、国幹会議で決定した東京都の外郭環状道路の事業化計画の根拠は、まさに交通量の予測に基づいていることになっている。いたずらに車利用のメリットを煽って、交通量を増加させれば、そのツケは国民に回ってくる。

正面から日米安保に向き合う

総選挙前、戦後タブーとされてきた日米安保、基地問題を果敢に取り上げ、普天間基地の「国外・県外移設」を明言したことは、新

政権への期待を大きくさせるものだった。議論を巻き起こしたこと自体は画期的な意義を持つ。

しかし、今年5月の沖繩訪問で、鳩山首相は全く逆に「抑止力」を盾に基地を沖繩に置くことを主張した。政権交代の重みも言葉の重みも全く感じなかった。

そもそも「移設先」が必要なのか。日米安保体制をどうしていくのか。その議論まで踏み込んでいない。「東アジア共同体」構想を打ち出しながら、中国や朝鮮半島を攻撃する米軍部隊を置くことは政策的には矛盾している。

米国に対し、当初の方針を毅然とした態度で貫くことができないということは、今後もひたすら米国依存体制を続けていくことを意味している。従来の政権と何も変わらない。

普天間基地問題で問われているのは、日本がアジア地域の平和構築に向けて、米国との関係も含めて、主体的で自立的な外交を展開することができるとどうか、岐路に立っている。「安全保障」に関する新しい考え方を政治的に示すことができるかどうか、岐路に立っている。

私たちは、この問題を、単に現政権への批判で終わらせてはいけない。米軍の長期間にわたる駐留の負担を、沖繩に押しつけてきたことを私たち本土の人間が自分自身の問題として捉え直し、真剣に向き合わなければならぬ時にいると思う。

企業・団体献金のすみやかな禁止

小沢氏や鳩山氏の政治献金問題、いわゆる「政治とカネ」の問題は、従来型の政治が変わってないことを示した。鳩山首相は「クリーンな政治」への国民の期待に応え、誠実に対応すべきであったが、現在も十分な説明は尽くされていない。

政治資金に関する問題は、単に一政治家の倫理問題にとどまるものではなく、民主主義のプロセスにおけるお金のあり方そのものを問うべきものだ。

企業・団体等による多額の献金は、資金力に乏しい普通の市民の政治的影響力を相対的に弱めることになってしまふ。また、こうした巨大組織のロビー活動が影響力を強めることは、道路建設・ダム・原発といった、私たちが望まない環境破壊型の巨大公共事業の推進にもつながるものだ。

一人一人の個人の意思が資金力に関係なく公正に政治に反映されるためには、企業・団体献金をすみやかに禁止することが必要だ。さらに言えば、日本は選挙費用がかかりすぎる。高すぎる供託金は民主主義の活性化にとって大きな障壁となっている。抜本的な政治改革を求めたい。

真の地域主権実現のために

戦後日本は、無限の経済成長を求め、自然を破壊し、資源を収奪し、物を作り続けることを繰り返してきた。その結果、物質的な豊かさを得ると同時に、多くの人が将来への底知れない不安を抱えながら、時間に追われた生活をしている。これまでの、経済成長に依存した社会構造から、環境と調和した地球にも人間にもできるだけ負荷をかけない社会のしくみへ、大きく転換するべきだ。

そして、そのためには、鳩山首相が掲げる「地域主権」を生かしたまちづくりが重要なカギとなる。国と自治体首長が権限を奪いあう分権論議ではなく、本当の住民主権を実現することができるか。公的サービスの「安い下請け」ではなく、市民力を活かすまちづくりをめざして、自治を高めていくことができるのか。わたしたち市民一人一人が試されている。すぐろ・なお、杉並区議会議員 みどりの未来・共同代表

甘い蜜



漫画 壺花花 <http://18787.main.jp>

他人のためなら頑張れる

国際協力NGO「JEN」理事・事務局長

木山 啓子さんに聞く



ハイチへの出動

ハイチで大地震発生の一報が届いてからしばらく情報が途絶えました。通信網が破壊されるほどの甚大な被害が予測されたので「これはまずいな」と思いました。同時に米国の懐にある国なので、私たちが出動すべきか少し迷いました。緊急事態発生当初は盛んに報道され注目もされますが、すぐに関心が薄れて支援のためのお金も集まらなくなる。災害は一瞬でも復興には長い時間がかかります。そして、刻一刻と変化する現場のニーズに沿って多様な活動を継続しなければなりません。中途半端で撤退する位ならやらない方が良いでしょう。でも情報が集まり、被害の全容が明らかになるに従って、やはり出動しなければいけない、と覚悟を決めました。

出動するかどうかは、出来る限り情報を集めた上で判断します。現地時間の（本年1月）12日夜に地震が発生し、13日の朝には出動を決定しました。北海道より少し小さいイスパニョーラ島の西側約3分の1がハイチでフラ

ンス語圏、東側のドミニカ共和国はスペイン語圏です。イラク支援の遠隔管理拠点であるアンマンに出張中だったフランス出身のJEN海外事業部長に連絡を取って、パリ経由で急遽現地に向かつてもらいました。そのほか、フランス語ができるスタッフ3人を別々のルートで送り出し、ドミニカ共和国の首都サントドミンゴ経由でポルトープランスに入ったのが19日です。日本の団体としては非常に早い方ですが、それでも発生から1週間も経っています。欧米の団体は70人とか100人とかの規模で、もう初日から救命活動を始めています。もともとそういう地方の差のある中、誤解される言い方かも知れませんが、現場では競争しながら活動しています。

米軍による現地の治安維持活動も報じられています。NGOの治安管理は独特です。私たちNGOは、自分達の身を守るためにできる限り武器は所持しないようにしています。武器を持つていると、強盗たちはまず私たちの命を奪ってから略奪しようとしています。でも丸腰であると判っていれば、脅して追い払っ

てから略奪すればいい。ですから銃を持った人たちと一緒に活動することは、自分たちのリスクを高めることになります。身を守る絶対的な方法はありませんが、極力地元で溶け込むなど、みな様々に知恵を絞って活動しています。

貧困がもたらす悪循環

津波は家々を丸ごと流してしまっているので、スリランカの被災地は、破壊しつくされた状態でした。しかしお金持ちの家は無事で残っているものもある。貧しい人は建物の質が悪いから被害も大きく復興に時間がかかる。復興に時間をかけている間に他の地域では生産活動を再開するから、格差がどんどん広がる。生活が再建されなければ教育どころではない。すると貧困がもつとひどくなり、建物の質が更に悪く…という悪循環が起ります。

近年の治安の悪化も悪循環の一要素です。例えばアフガニスタンのような所では治安の許す地域で活動せざるをえない。すると治安が悪くて支援を受けられない周辺地域との格差が広がってしまう。格差の存在自体が不安定化要素になるので、隣接している地域の治安も悪化してしまう。また、治安が悪いと治安対策コストがかさんで、限られた資金の中で支援に使えるお金がさらに少なくなる。

より大きな課題は支援の質です。本来人々が持っている力が生かされ、依存を高めな



ような支援が質の高い支援であると私たちは考えています。依存を高めてしまうと一層貧困から抜け出せなくなり、更なる支援が必要になる。平時でも緊急時でも自分達の問題を自分たちで解決できず、いつも支援を仰がなくてはならなくなる。緊急時にはとにかく命を救え、生活を救えと目先のことだけで行動しがちですが、一歩引いて命を救いながらも依存を高めない、自立を支えるような支援をすることが非常に大切です。

ですから私たちの全ての活動は自立のための手段です。民生支援のポンプ式井戸建設も、壊れることを前提として活動を行う。つまり作業の中で部品を調達・管理し、壊れた部品を分解し取替えて元通りにするという当たり前のことを現地の人たちだけでできるように

仕組みを作るように導く。直せることが次第にわかると、壊れていた周辺の井戸も自分達の手で直したと嬉しそうに報告してくる。人の役に立つことが嬉しくなり他の井戸も直しに行き、その姿を見て発奮して自分達も井戸を直せるようになりたいと言う人たちが出てきたりする。

人道支援という名の下に自衛隊を外国に派遣することに対して意見を求められることがあります。外交としての意味などを度外視して、純粹に支援だけの観点からいえば、依存を高めないための配慮も極めて弱く、質が悪すぎると思っています。それよりは、質の高い支援を提供出来る組織に任せて、被災者の自立を達成するという根本的な解決を図ってもらいたいものです。

傍観は自分のリスク

そもそも支援をするのは、人道的に放置できないからです。紛争や貧困などを放置すること自体が、私たちにとって大きなリスクでもあります。格差が不安定の元となり、治安が悪化すれば、国境を接した隣国にも不安定な地域が広がって、まるで紛争が輸出されたような状況になっていきます。今のアフガニスタンが例となるかもしれません。

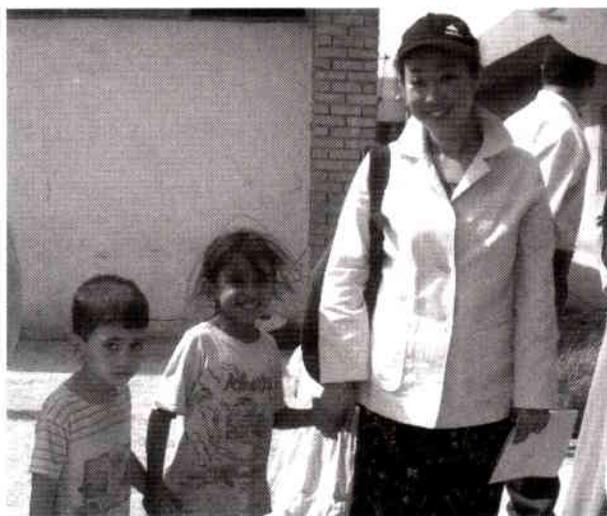
旧ユーゴ紛争でも、住民はみな戦争の開始を予期していたのかと思っていました。「そんなこと全然思っていなかった。最初はスロ

ベニア、続いてクロアチアが独立したので、ボスニアも戦争に巻き込まれるだろうか、でもまさか自分たちの国が戦争に突入するわけがないよね」と話し合っていたそうです。まさかと思いつながら戦争を回避するために自分たちが出来ることを考えて、戦争反対のデモをしたそうです。当時人口50万人のサラエボで、なんと30万人のデモをやった。ものすごい盛り上がりで、これでみんな戦争を回避できたと確信したそうです。大統領選挙でも戦争反対派の候補が当選して「良かった、これでもう戦争は起きないね」と言って1週間に戦争が始まったと聞きました。それでも、デモも成功したし大統領も戦争反対派だし、戦争はそんなには続かないだろう、夕方には戦争が終わりましたというニュースがあるだろう、くらの気持ちでいたそうです。しかし1日経つても終わらない。じゃあ明日かな、まあ来週には終わるよね、と相変わらず軽く考えていた。ところが次第に砲撃の音を耳にし、知り合いや親戚が怪我をしたとか死んだ、という話を聞くようになる。とうとう自分達も戦争に巻き込まれたのではないかと、と本当に思うようになったのは戦争開始から1カ月位たった時だったといえます。それから戦争は4年間続いた。この話を聞いて、この日本でもいつ何が間違つて戦争にならないとも限らない、と思うようになりました。ですから分岐点では必ず行動することが大事で、次の

時にやればいいでは許されない、と今は強く
思います。

極限状態の人に教えらるること

紛争や災害など緊急事態から支援に入ること
が多いので、愛する人や大切な財産を失っ
て悲しむ人にいつも出会います。全てを失い
あまりに落ち込んだ人は頑張ろうという気持
ちには中々なれません。第二次大戦のときに
夫と次男を、今回の旧ユーゴ紛争で長男と三
男をなくして、天涯孤独になったというおば
あさんに出会ったことがあります。それでも
励ましたいと思って、いまの望みを質問した
ら「一日でも早く死ぬことです」と言われま



難民キャンプにて筆者

した。そんな方のために私たちができること
は何か、と考えながら活動しています。前向
きに生きる力を取り戻してもらうため、私た
ちは心のケアを大切にしています。

絶望の淵にいる人は落ち込み過ぎていて挨
拶もできないこともあります。ソーシャルワ
ーカーが編み物を勧めながら「今日はごきげん
いかがですか」などと話しかけます。暫く時
間が経って編み物が進んでくると、話し始め
ることもあります。話してみれば、同じ様に
悲しい思いをしている人がほかにもいること
に気がつき、話して、思いを言葉にすること
で少しずつ乗り越える心の準備が出来てきて、
自分が癒されてくる。編み物は家に持って帰
れないようにしています。集まってみんなと
話す機会をなるべく多く持つてもらうため
です。作業をし、話をする事で少しずつ落ち
込みの悪循環から解放されていく。セーター
が仕上がる頃には、サポートし合える仲間の
グループができています。JENは自立支援
なのでいざれ去っていく団体です。ですから
現地にサポートグループを作ることが非常に
大事だと考えています。

2003年のイラク戦争の後、イラクに出
稼ぎに行ったスリランカ出身の父親がいます。
家族は父親の身を案じ、父親も望郷の念に耐
えながら、家族一緒に裕福に暮らせることを
夢見て1年間頑張り、危機も乗り切つて帰つ
てきました。その1週間後の2004年末の

津波でこの父親は、自分以外の家族をみんな
亡くしてしまふのです。私たちは、お酒にお
ぼれて自暴自棄になった父親を慰めることが
出来ずにいました。心のケアのプロジェクト
に呼び掛けても来てくれない。そんなとき、
この父親は、自分と同じように家族を全員亡
くした男の子に出会います。父親は「この子
は自分と同じだ」と思い、「この子のために生
きよう」と思つてから元氣を出し、お酒をやめ、
とうとう私たちの心のケアのための魚網作り
のプロジェクトのリーダーになってくれました
ました。そんな例を私は世界中でたくさん見てき
ました。本当に極限的な状況のときに人は自
分のためには頑張れないけれど、誰か別の人
のためならば頑張れる、その人を喜ばせたい
と思う利他的な精神が、私たちひとりひとり
のDNAの中にある、と気づかせてもらいま
した。

(構成・文責 本誌編集委員 野澤 信二)

きやま・けいこ 1994年、JENの前身であ
る日本初の連合NGO「日本緊急救援NGOグル
ープ」(Japan Emergency NGOs 本部事務局・東京都
新宿区)の立ち上げに参加。2000年まで6年
間旧ユーゴスラビアに駐在。モンゴル雪害やイン
ド西部大地震、フセイン政権崩壊後のイラクなど
でも活動。日経ウーマン誌「ウーマン・オブ・ザ・
イヤール2006」総合第1位。

●60年安保闘争50周年、ベトナム解放35周年記念

池澤夏樹・吉川勇一講演会

池澤夏樹「『カデナ』を記して——40年あとのベ平連」
吉川勇一「鶴見俊輔さんの『小田実の組織論』について」

DVD ロングインタビュー「鶴見俊輔 戦後日本人の記憶」(一部上映)

- ▶日時：6月16日(水) 午後6時30分～9時 (開場6時)
- ▶会場：東京・渋谷 千駄ヶ谷区民会館
(JR原宿駅、東京メトロ明治神宮前駅 徒歩7分)
- ▶参加費：800円(資料代として)
- ▶主催：市民の意見30の会・東京 ▶協賛：市民意見広告運動
(同封チラシ参照)

■60年安保闘争から半世紀、ベトナム戦争終結35周年にあたる今年、沖縄普天間基地撤去を要求する人びとの声が再び大きなうねりを作りだそうとしています。この記念すべき年にあたって、最近ベトナム戦争時における沖縄の人びとの反戦活動を描いた小説『カデナ』を発表された作家池澤夏樹さんに、この作品を書いた理由と、沖縄の現状への思いを話していただきます。

■また「鶴見俊輔さんの『小田実の組織論』について」と題して、哲学者の鶴見さんのDVD記録映像の一部を上映するとともに、吉



「米軍基地を抱え込んでいる沖縄があり、あの戦争で捨て石にされた沖縄がある。沖縄は被害者の島です。当然、それを組み込まなければ

ば沖縄を書いたことにならない。そんなに意識していなかったが沖縄が書かせたんですね」
「僕はどうしようもなく反戦的・反軍的なんです。いかに彼ら、戦争に加担する勢力の鼻を明かしてやるかを考えている。最近、僕は『ベ平連』だと言っています。40年遅れてきた『ベ平連』……」

「戦争の歴史を背景にしているとはいえ、真ん中にどんと据えてしまうと、怨念と糾弾の小説になってしまう。実際には軽くないが、もう少し軽いものの中に埋め込んでおきたかった。大きくて強い組織に、小さくて弱いものがどう立ち向かえるか。徒手空拳ながらやれることがある。それも歯を食いしばらずに」……

川勇一さんに講演をお願いします。当初は、故小田実さんをめぐる連続講演の締めくくりとして、鶴見さんに話していただく予定でしたが、講師のご都合により変更致しました。ご了承ください。



(朝日新聞 2009年11月10日号より)



高校無償化と朝鮮学校

越田 清和

私が住む札幌市には、北海道朝鮮初中高級学校がある。ここに通う生徒数は113人、そんなに大きくない学校だが、北海道から生徒が集まり、寮で暮らす子どももいる。

この学校は、「ウリハツキョ」(監督キム・ミンジョン、2006年)の舞台となった学校としてよく知られている(少なくとも北海道では)。また毎年秋、日曜日に学校をまる一日開放して「アンニョンフェスタ」を開き、自分たちの学校や朝鮮文化を多くの人に紹介している。フリーマーケットや食品販売もある。とくにここで売るキムチは評判で、すぐに売り切れてしまう。そのためか(？)、平岡地区という札幌市内からやや離れた地域にあるにもかかわらず、いつも2千人以上の人たちが参加している。

定志向型の民族教育へ

1997年からは、日本の学校の教員が授業を行なう「日朝友好促進交換授業」も行なっている。また「ウリハツキョ」の上映などをきっかけにして、大学生など若い日本人と朝鮮学校生徒の交流も少しずつ広がっている。180万人が住む札幌市でどれだけの人か「アンニョンフェスタ」を知っているのかはわから

ないが、新聞でも報道されるし、秋になると「アンニョンフェスタがあるな(キムチを買いに行きなきゃ)」と思う人たちは確実に増えている。

こうした動きは札幌だけでなく、日本各地にある朝鮮学校の周りにはあるはずだ。それは、日本人の側が作り出してきたというよりも、「帰国指向型の学校」から「日本で暮らしながらも、母国語、民族心、民族の文化を継承し、朝鮮人としてのアイデンティティを育む定志向型の民族教育を施す学校」(ファン・サンギユさん―北海道朝鮮初中高級学校教員の発言)へと性格を変え、少子化などの影響で生徒数が減ってきた朝鮮学校が、学校を維持するためにつくりだしてきた動きといっただろう。

それに対して、日本人の側はどうすればいいのだろうか。アンニョンフェスタでキムチを買う(私のことだ)のもいいが、もう少し何かできないか。

北海道には約6千人の朝鮮人が住み、そのうち約2千人が就学年齢だと言う。そのうち札幌市にある朝鮮学校に通っているのは、113人。朝鮮人の子どもの多くは、日本の学校へ通っているということになる。

全ての朝鮮人の子どもが朝鮮学校へ通うべきだとは思わないが、「朝鮮学校に行きたい」あるいは「日本の学校には行きたくない」と思う子どもは、自由に通えるようになった方がいい。そのためには、多くの人が長年にわ

たつて主張してきたように、いま「各種学校」として扱われている朝鮮学校などの外国人学校を「正規の学校」として認め、日本の公立・私立学校との間にある制度的差別をなくすことが必要だ(補助金など外国人学校が抱えるさまざまな問題、その解決のための方法としての「外国人学校振興法(案)」などについては、『M-ネット』、2009年11月号、移住労働者と連帯する全国ネットワーク、に詳しい)。

露骨な差別と権利剥奪

しかし、「途上国」への教育支援には熱心な「教育好き」の日本社会は、何故か日本に住む外国人の子どもの「教育への権利」についての関心は低い。とりわけ在日朝鮮人の子どものたちの権利については、露骨に差別し、その権利を奪ってきた。

その典型が、2003年8月に文部科学省が発表した、外国人学校の中でも「インターナショナルスクール」などに大学受験資格を認め、朝鮮学校には認めないという決定だ。初めは、韓国学校や中華学校も含め「アジア系外国人学校」全体が対象から外されていたが、内外からの批判を受けて「本国で正規課程と位置付けられた学校」であればいいという項目を付け加え、韓国学校など「公的ルート」による確認ができる外国人学校も対象に含めることにした。というよりも、これは朝鮮学校だけを排除するために考えた方策だ。

これは、2002年9月の「拉致問題の判明・北朝鮮への制裁外交」直後に自民党政権下で起こったことである（だから、仕方がないという訳では全くない）。しかし政権が変わったにもかかわらず、「共生」を掲げる鳩山・民主党政権は自民党と同じように教育における差別的な制度、朝鮮学校の排除を行なった。4月1日から実施された「高校無償化」から朝鮮高校など外国人学校を排除したのである。その後、4月30日には韓国学校やブラジル人学校、インターナショナルスクールなど31校を対象に含めることにしたが、朝鮮学校は含まれなかった。

流れを変えた鳩山発言

文部科学省は、これはまだ最終決定ではなく「専門家会議」で検討し、8月頃までに結論を出すとしている。しかし、この「高校無償化」（正確には、公立高等学校の授業料不徴収と高等学校等の就学支援金支給）制度は、もともと各種学校である外国人学校についても対象にすることが想定され、文部科学省が財務省に提出した概算要求でも朝鮮学校などの外国人学校を含めて試算されていた。この動きを変えたのは鳩山首相の発言だ。

私が読んだ新聞では、こう報道された。

「鳩山由紀夫首相は25日、衆院で審議入りした高校無償化法案に関連し、在日朝鮮人が通う朝鮮学校を無償化の対象から除外する方向

で最終調整していることを明らかにした。理由について『朝鮮学校がどういうことを教えているのか指導内容が必ずしも見えない』と指摘した。中井治拉致問題担当相が「わが国が北朝鮮に制裁を行なっていることを十分に考慮すべきだ」と文科相に申し入れたことを受けての発言である（『北海道新聞』2010年2月26日）。

2003年の大学入試資格の時もそうだったが、今回も、こんな露骨な差別発言をし、それを制度化していこうという発言と動きに呆れ、頭に来た。多くの人がそう思ったのだろう、この動きが表面化してから、私たちを含め、日本各地で「朝鮮学校を制度の対象から除外するな」という声があがり、政府に対する要請・要望、地域での集会などもあいついだ。

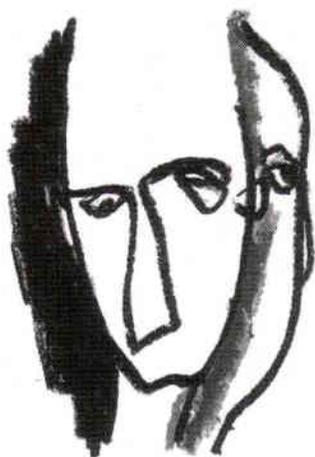
私たちも緊急の要請書を準備し、首相と文部科学省、民主党北海道本部に提出した。締め切りの時間を過ぎても、メールとFAXが届いていた。朝鮮学校の学生（携帯メールがほとんど）や卒業生、保護者などからもたくさんのお手紙が届いた。

「教育内容がわからないから」という理由で、日本で生まれ育った子どもたちの権利を奪うことはできない。「すべての子どもに学ぶ権利を」は世界の常識になっているではないか。「大使館など外交ルートで教育内容が確認できない」（国交がない北朝鮮を除外するための口

実だ）というなら、鳩山首相や文部官僚も「アンニョンフェスタ」に來たりして、自分たちで調査すればいいではないか。それをしないのは、朝鮮学校排除という結論が先にあるからではないのか。

文部科学省が結論をだす8月までに、日本社会の各地から「朝鮮学校に高校無償化制度を適用することを求める」声をあげていきたいと思います。

（こした・きよかず、ほっかいどうピースネット）



◆ 119号の訂正
お詫びして訂正します。
・35ページ3段目
(誤) 猪俣章臣
(誤) 猪又章臣



6・19集会 「もうやめよう！日米安保条約」

北野 誉

植民地主義と構造的沖縄差別

これ以上の基地負担はやめろという沖縄の切実な声にもかかわらず、鳩山政権は辺野古への「舞い戻り」による決着を図ろうとしているようだ。

この間の動きは、沖縄に対する「構造的差別」をあらためて白日に曝した。そしてそれは近代日本の歴史総体を貫いている。こうした植民地主義の歴史の発端を昨年140年目を迎えた「琉球処分」におくならば、今年100年目を迎える「韓国併合」はその確立点である。しかし、この植民地主義は、敗戦によって消滅したのだろうか。むしろ戦後「冷戦」の過程で、それは日米安保体制に変容しつつ、この東アジア地域における支配秩序として、いまなお継続し、再生産されているのではないか。

天皇制と植民地主義を問う私たち反天皇制運動の共同行動は、今年の反天皇制運動の課題を、こうした植民地支配責任と天皇制の問い直しに置き、2・11反「紀元節」集会とデモを行った。さらに、今年の4・29反「昭和の日」行動は、新しい反安保行動をつくる実行委の仲間からの提起をうけ、4・28と4・

29両日を、それぞれの実行委員会による連続した行動（天皇制と植民地主義を問う連続行動）として取り組むことになった。

1952年4月28日、サンフランシスコ講和条約の発効に伴い、「本土」から切り離された沖縄は、引き続き米軍支配下に置かれることになった。同じ日、在日朝鮮人・台湾人とあった旧植民地出身者たちもまた、「日本国籍」を正式に、一方的に剥奪された。こうした部分を切り捨て、自らの意識の外に置くことで、はじめて自らの「独立」を謳歌することができたのである。そしてそうした「戦後秩序」の確立にあたっては、「天皇メッセージ」で明らかのように、昭和天皇ヒロヒトが大きな役割を果たしている。そのヒロヒトの誕生日である4月29日「昭和の日」とは、ヒロヒトと「その時代」を結びつけ、まるごと賛美する記念日にほかならない。

28日の「安保と沖縄を考える」集会（反安保実主催、文京区民センター）は、沖縄から新崎盛暉さんを招いて行った。新崎さんは「日米安保体制の歴史と現在、そしてこれから」と題して、戦後の出発から50年代、ベトナム戦争から「復帰」を通じて米軍基地が沖縄に集中し、再編強化されていく流れを整理し、また「日米同盟」が政治の主軸となっていく歴史について述べた。反安保実行委の天野恵一さんが「ヤマトの立場から」応答。安保条約の成立や「密約」問題に天皇ヒロヒトが深く関与してい

たことを、文献資料を紹介しながら論じた。

翌29日の「反「昭和の日」行動」（同行動実行委主催、恵比寿区民会館）は、立命館大学の庵道（あんざこ）由香さんを講師に行われた。朝鮮植民地の動員体制に関する研究をしている庵道さんは、植民地における物的・人的・文化的・精神的動員の実態を分析、あわせて、それにもかかわらず、朝鮮民衆が8・15後ただちに地域から建国準備会を組織したことにみられるような主体的力量を蓄積していたこと、それが、南半部においては米軍支配によってつぶされていったことなどについて語った。この日は、集会後、渋谷へのデモも行われた。

6・19集会へ結果を

連続行動はこれで終わったわけだが、これに関わった仲間も参加し、いま、2010安保連絡会というグループが作られている。今年、60年安保闘争から50年でもある。そのことを契機として、首都圏の反戦・反基地、反安保を掲げて運動を持続している人びとが集まり、6月19日に、永田町の社会文化会館で、「もうやめよう！日米安保条約」と題して、大きな集会を行おうとしている。ぜひこちらにもご参加を！

（きたの・ほまれ、反天皇制運動連絡会）

すさまじい社会から

荒井 康裕

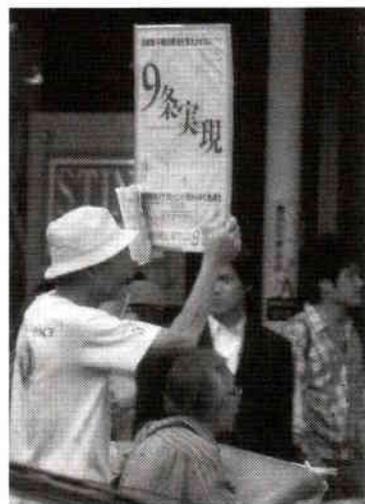


できた！自分主催のデモ in 京都

「日本は今すさまじい社会になっています。勝ち組・負け組」などという戦争屋の言葉に乗せられ放しのねずみ達の行進は、このままでは近い将来きつと戦争の海に突っ込んでしまおうでしょう」「私も戦争に協力しません——小泉劇場はもうたくさん」。5年前のA・A(※)61年11月9日、生涯で唯一であろう私が主催したデモのビラの文句です。当時、地元京都で2日間、ブッシュ——小泉首脳会談が開かれ、次いで、自分が首相になったら戦争放棄憲法を書き変えて戦後レジームを終らせる、と高言する人物が実際に首相におさまる、などというすさまじい社会。そのすさまじさの故か、30人余の方々と京都市役所前から祇園円山公園まで歩き通すことができた。私のような気の小さい者がデモの先頭に立つてしまったのだった。その夜、蒲団に入って「この営みを今日1日だけで終わらせてはだめだし、もつたいない。今日の気持ちを明日につなげたい。体を動かして行こう」と決めた。

スタンディング&どこでもボード

そして始めたのが、毎年5月3日付や11月



2007年 三条通りで

3日付新聞に掲載される「九条実現」「戦争を止めよう」1ページ広告を切り貼ってのダンボール・スタンディングだ。以来、デモの日がたまたま9日だったので、毎月9日の夕方5時から1時間、JR京都駅頭に立っている。翌年の3月から、立つ場所に家の近くの地下鉄醍醐駅スーパー脇を加えた。やはり1時間、昼の1時から。また、この「九条実現」広告ボードをゼッケン代りにして、何処へ行くにも持ち歩くようにしている。キャッチ・アイも兼ね、ボードには小さなプラスチック容器を花瓶にして付け、そこに折々の草花を絶やさない。お陰で面の皮だけはお厚くなった。パソコンも使えない純アナログ種なのに「反戦老人クラブ・京都」の一世話人になるわ(3年前、某週刊誌京都読者の会を立ちあげるわ(昨年未、といった案配で、自分でもオカシイ。

生れ故郷横浜でも反戦の集いを

ところで、私はもう半世紀以上京都に住ん

で来たが、生れは横浜下町育ち。冠婚・葬祭で横浜へ赴く時、さすがにゼッケン代わりの「九条実現」ボードが主客双方に多少の波風、緊張をもたらす。が、昨年5月29日、念願の「御福の集い」を横浜で開催できた。即ち、65年前のB29横浜大空襲の日である5月29日を「御(5)福(ふ)福(ふ)ふ(ふ)ふ(ふ)」と名付け、ささやかながらこの日、反戦「御福(ごふく)の集い」を開けた。今年の第2回「御福の集い」は、昨午が家族だけの食事会だったので、企画をオープン化し、横浜市開港記念会館で5月29日(土)午後1時半から5時まで開く。広島爆心地被爆電車内奇跡生存の米澤鐵志さんをお招きしてお話を伺う。果して何人の方に参加して頂けるか、胸ドキドキ。

さて、「御福の集い」に先立ち、3年の猶予期間を過ぎた国民投票法(改憲手続法)が5月18日から施行されようとしている。同法が成立させられた時以来、3年後を惨めな気持ちで迎えるようなことだけはしまい、と立ち歩き続けて来た。幸い、例えば一昨年4月17日、名古屋高裁が自衛隊のイラク派遣は憲法9条違反とはつきり判決し、確定している。加えて沖繩の人達の教えがある。

今、惨めではない。

※A・A = After・Atomic(ヒロシマ・デーを元年とする核屠)

(あらい・やすひろ、本会会員「反戦老人クラブ・京都」世話人 無職 71歳)

幼子からおじい、おばあまで 沖縄は黄色い意思表示!

大木 晴子

4月25日沖縄・読谷村で行われた県民大会では「政府にイエローカード(警告)を突き付けよう」というおもいを込めて黄色いものを身につけたり、持ったりして人々は集まりました。そして仕事などで参加出来ない人たちは心は一つと黄色いシャツなどを身につけて一日過ごしたというニュースが沖縄で流れていました。



「辺野古の命を守る会」では、Tシャツや帽子を用意しました。報道関係の皆さんも腕にリボンを結んだり、琉球朝日放送の三上智恵さんは、鮮やかな黄色いジャケット

ト姿でした。

私は、襟に黄色を使い、丸木美術館の鳩の絵のTシャツを着ていきました。「沖縄戦の図」を描かれた丸木夫妻の想いも胸に秘めて参加しました。

早くから会場にいましたので9万人の人でうまつていく様子がよくわかりました。沖縄の皆さんは、淡々という言葉がぴったりするくらい穏やかに淡々と集まりました。幼子からおじい、

琉球朝日放送の三上智恵さん
黄色いジャケットで



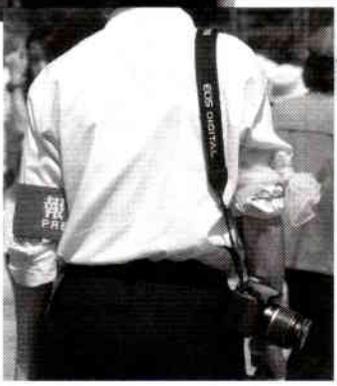
彫刻家金城実さんの9条Tシャツ

おばあまで気持ちの一つになっているのが見て感じとれました。もの凄い人数なのに静かでした。子どもたちに大人たちの真剣な想いはしっかりと伝わっていました。彫刻家金城実さんの憲法9条のTシャツが照りつける太陽の下で輝いていました。

私は、もうこれ以上沖縄に苦しみ押し付けることは出来ない! そう強く心に誓うことが出来た県民大会でした。

(おおき・せいこ、本会役員「明日も晴れー大木晴子のページ」主催。写真も)

報道記者の腕にも黄色いリボン





完成『どうする安保』

小林 アツシ

日米安保条約改訂50年にあたって『どうするアンポ』というDVDを創ることになり、ディレクターの私は作品中に街頭インタビューを挿入することにした。

街頭インタビューというのは見ず知らずの人に声をかけるのだから当然のことながらかなりの確率で断られ、なかなか消耗する仕事である。それでも今回は可能な限り多くの人の声を聞きたいと思った。2009年10月22日、アシスタントと2人で質問する役と撮影する役とを交代しながら、東京都内の巣鴨、渋谷、原宿、秋葉原、有楽町、新橋の各駅周辺で朝から夜まで

ほぼ1日かけてインタビューした。結果としてこれまで私が行った街頭インタビューの中で130人以上という最大の人数で、内容もなかなか興味深いものになった。質問内容はできるだけシンプルで答えやすいように「日本

にアメリカ軍っていますよね。いると思いますか、いらなと思いますか？」とした。難しいテーマなので、「考えたことが無い」と戸惑いを見せる人も多く約3分の1の人たちが「わからない」「答えられない」と回答した。

意外だったのは、日本に米軍がいると答えた人と、いらないと答えた人が、ほぼ同数だったことだ。もちろんたかだか130人ぐらいのインタビューだから、これが世の中すべての人たちの傾向だと断言することはできない。ただ、最近の普天間基地の「移設」に関する報道や政府関係者の発言が「日米安保があるから」「日米同盟(一)は大事だから」などとさもそれが国民全体の合意を得ているかのように前提としていることを考えると、「米軍はいらない」と言う人が結構いるということはおもつと伝えるべきだと思う。

ここで正直に書いておくと、「3分の1の人が米軍はいらないと言った」という数字にも注意すべき点がある。これらの人たちのうち少なからぬ人たちは「自衛隊が守れば良い」と言っているのだ。これをどう捉えるかは難しい。そもそも軍隊がいけないのだから憲法違反の自衛隊を認めるなどという発想は断じて許さないとする人もいるだろう、あるいはまずは自衛隊を容認する人さえも取り込んで日米軍を減らすことから始めるべきだと思う人もいるだろう。その判断は皆さんにおまかせする。



今回のDVD『どうするアンポ』には、街頭インタビューでまともに答えてくれた人は全員の声を集めたロングバージョンも特典映像として収録している。「こういう人には、こう言えば伝わるんじゃないか」と、それぞれの現場の方が考える材料にしていただけとたいへんうれしい。

日米両政府は安保50年を機に日米同盟を「深化」させるなどと言っている。普天間基地「移設」の問題に加えて今後報道されることも多いだろう。だからこそ今、安保条約の問題を多くの人に考えてもらえるチャンスだと思おう。

(こばやし・あつし、映像ディレクター・フリー)

戦録
反交

① 嘉手納基地前で座り込み、米軍に逮捕

—古屋 能子(よしこ)さん—

吉川 勇一



連(ベトナムに平和を！市民連合) 初期から参加。67年からは、東京・新宿駅で1人で反戦のカンパをよびかけ、「新宿ベ平連」を立ち上げ、その代表になり

ました。いつも和服がよく似合い、若い人たちからは「古屋のおばちゃん」と親しまれ、尊敬される人でした。

編集委員会で、こういう連載を載せるようにという意見になりました。すぐ死ぬかもしれないから吉川に書かせておいたほうがいいのではないか、などということではないのか、などと嫌味も言ったりしたのですが、とにかく、毎号となるかどうかわかりませんが、書いてみることにしました。前号でハワード・ジンさんのことを書きました。それ以後、井上ひさしさん、星野安二郎さん、ばばこういちさんと、残念な逝去の報が続きました。今回は、池澤夏樹さんの小説『カテナ』とも関連して、古屋能子さん(1922〜83)のことを書くことにしました。

池澤夏樹さんの小説『カテナ』には、1968年8月、ベ平連の27名がカテナのゲート前で座り込みをして逮捕、退島処分され、その後は、「渡航身分証明書」の提出を拒否して、船に乗ったまま沖繩と鹿児島の間を船上で往復することになった話が出てきます(285〜287ページ)。このほとんどが事実のことでした。その行動の中心人物が古屋能子さんだったのです。

山梨県生まれ。反戦活動家で、65年「ベ平

連」(ベトナムに平和を！市民連合) 初期から参加。67年からは、東京・新宿駅で1人で反戦のカンパをよびかけ、「新宿ベ平連」を立ち上げ、その代表になりました。いつも和服がよく似合い、若い人たちからは「古屋のおばちゃん」と親しまれ、尊敬される人でした。

沖繩「復帰」以前の1968年夏、嘉手納米軍基地では、沖繩原水協等の米軍基地前抗議集会の行動が予定されていました。古屋さんを中心とするベ平連のグループ約30人も、これへの参加を決めており、8月16日午前10時前、嘉手納米軍基地第一ゲートの基地内50メートルのところ、ベ平連の旗を立て、座り込みに入りました。

それから20分ほど後、カービン銃を構え、引鉄を動かしたり、腰の拳銃を撃つぞという姿の米兵たちが、台座で突きまくって逮捕にかかったのです。非暴力で坐っていた古屋さんたちは、2人ずつの米兵から頭と脚を持たれトラックに放り投げられました。基地内のAP詰め所へ連れこまれたあと、コザ警察署に身柄が移されます。署では、住所氏名を明らかにすれば即時釈放との話もありましたが、古屋さんたちはそれに応じなかったため拘留され、続いて米民政府から退島命令が出されて、鹿児島行きの船「おとひめ丸」に放り込

まれました。

当時、米軍施政下の沖繩と「本土」との往復には、「渡航身分証明書」が必要でした。「おとひめ丸」に乗せられた古屋さんたちのベ平連グループ23名中、5名は、鹿児島で身分証明書の提示を拒否しました。すると、何と、船は古屋さんたちを降ろさず、乗せたまま沖繩に出発したのです。再度の沖繩でも上陸は不許可、こうして古屋さんたちは沖繩と鹿児島間を船で往復を続けるということになったのです。

ベ平連は、法務省への抗議声明を出すとともに、鹿児島地裁に対し、人身保護法による提訴をしました。そのために、私は、ベ平連の角南俊輔弁護士とともに鹿児島に出かけたのですが、裁判官は人身保護法は適用できないと裁定し、上陸の手がなくなる状況でした。しかし、22日、ふたたび鹿児島についた「おとひめ丸」から、身分証明書を見せずに実力上陸したのでした。こうした古屋さんの沖繩闘争は、一生の間、続けられたものでした。

嘉手納での座り込みや、身分証明書の提示拒否などの古屋さんたちの行動は、市民運動の非暴力直接行動、市民的不服従行動の典型的なものだったと思っています。

このときの詳しい報告などは、古屋さんの著作『新宿は、おんなの街である。』(第三書館 1984年 2千円)に含まれています。

(よしかわ ゆういち・事務局 編集委員)

開店間もない新宿東口・ヨドバシカメラの店頭に並び、米国アップル社のiPad（アイパッド）の予約をしてきた。二三番目だった。予約の受付初日の今日、全国の家電量販店で、似たような光景が見られたはずだ。

先日、米アマゾン社のKindleは手に入れた。いっばんには、このiPadとKindleを「電子書籍」と見なす。平穏をむさぼっていた日本の出版業界にとって、「黒船襲来」だとも言える。電子書籍が普及すれば、紙の本が減びると危惧する人びともいる。最近、出版関係の団体が催した「電子書籍を考えるシンポジウム」では、

500を超える席が瞬時に予約で埋まったと聞く。関心は高く、浮き足だつてさえる。

ブックデザインを仕事にしている、紙との付き合いは深いつもりだが、あらためて、紙とはつくづく不思議なものだと思ふ。脆いようであり、強い。強そうであり、適度なしなやかさが魅力だ。ティッシュペーパーの心地よさは、柔らかさからだけけるのではない。強靱さがなければ、ポロポロと崩れてしまうはずだ。油断して、紙のエッジで指を切ったひとも多いだろう。切った指の痛さは独特だ。食品などの包装にしても、紙のよさは、空気や湿度をよいあんばいで遮断し、かつ流通させる点だ。光にしてもさうだ。混雑した飲食店

でも、隣の客とのあいだに紙の仕切りがあるだけで、雰囲気が変わる。

ある建築家から聞いた話では、住宅にはどこどころに脆い場所をつくっておくといふそうさだ。脆さの前では、振り舞いがいねいになるからだ。たしかに、障子や土壁の近辺では、仕草に気を配る。いっばう、疲れていて気ぜわしいときにかぎって、へやのあちこちに額をぶつけたりする。本も、紙一枚ずつの脆さゆえ、ページを繰るひとの動作と気持ちをしとやかにするのもかもしれない。

鉄道や地下鉄の駅構内のデザインはさういふ

脆さの強さ

んと改善されてきているが、素材はどうかと見ると、無味乾燥で強固である。ほかの公共スペースでも、プライバシーの保護もあつて、空間を二者択一のように、画然と区切つてしまふ。凶暴になりがちな人びとの気持ちを受け止めるには、紙のような脆さも必要ではないか。透けているのか透けていないのかの曖昧さに、社会の共通感覚が境界線を引いているのだ。セキュリティや防衛論議に通じる話かもしれない。

紙は、そこにあつて当たり前と思われている。無くてあわてるのは、涙をかみたいと

きやトイレを持ちだすまでもない。まるで空気のような紙は、だからといって存在感がないのではない。空気が人間にとって不可欠であるように、だ。こう言えるだろう。人びとは危機に面して、はじめて紙の存在に気づく。消えはじめて、レコードの紙ジャケットやCDの歌詞カードを惜しむのだ。いまは、本であわてている。

同時に紙は、空気のような存在に形を与えらる。わたしたちが折々に抱く感情は、日記や短歌、俳句や川柳として紙に書き留められたとき、姿を地上に現わす。感謝のひとつは

ハガキに記されなければ可視化しない。写真の印画紙や印刷もまた、思いを紙に残す行為の延長だ。空気のように

からこそ紙は、人びとの見定めがたい心の揺らぎを写しとれるのだ。脆さは、脆さを理解する。

ワープロやメールも、紙に書くおこないの延長線上にあり、もはや空気のようになつてしまった。電子書籍の成否は、空気のようになれるかどうかにかかっている。電子書籍が空気のようになるとき、本の世界はさらに拡張すると考えられる。

（すぎき・ひとし、グラフィック・デザイナー、題字デザインも筆者）



『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』

『沖繩密約』を背負って―若泉敬の生涯』

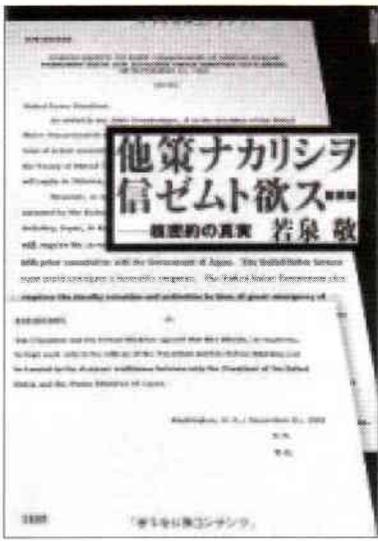
〔若泉敬著／文芸春秋社、普及版2009年9月／1890円〕

〔後藤乾二著／岩波書店、2010年1月／3780円〕

「密使」若泉敬氏の自殺

私が若泉敬の自殺を知ったのは、昨年（11月21日（土））の朝日新聞の夕刊の記事によってであった。

「有事の際は沖繩への核持込を認めるといふ日米密約の実態を交渉の当事者だった故若泉敬・元京都産業大学教授が著した『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』（文芸春秋社刊）が初版から15年経て新装版となって10月末から発売されている。ホワイトハウスの小部屋にこもつ



て密約に署名する佐藤栄作首相とニクソン米大統領―沖繩返還に合意した日米共同声明から21日で丸40年を迎えた。」

「若泉氏は佐藤首相の『密使』だった。96年に死去。がん性腹膜炎と公表されたが、新装版の末尾で、交渉のあった外交ジャーナリストの手嶋隆一氏は『毒杯をあおって自殺した』と明かす手嶋氏は『いつかは死の真相を明らかにすべきだと感じていた』と言う」。

安価な新装版の出版をつける文章のなかの、この友人の発言にわたしは驚かされた。

この件はもう一度大きくとりあげられた。『沖繩に申し訳ない』30代で密約交渉の若泉氏 自著英訳合意の日 知人前で毒薬」という見出しの、自殺の動機の解説記事が載ったのである（朝日新聞）2010年3月11日）。

『沖繩に申し訳ない』。若泉氏が何度も口にした言葉だ。戦争で占領された沖繩を取り戻す交渉は、容赦なく裏取引を迫られる過酷な外交の「戦場」だった。復帰はしたものの、沖繩は過密な基地の重圧を受け続け、本土の人々はやがてその現実を目を向けようとしな

くなる。／94年5月、『他策』出版。国会での証言を切望し、喚問があるはずと考えていた。だが呼ばれることはなかった。／若泉氏は沖繩での遺骨収集に参加し、戦没者を悼む6月23日の慰霊の日にも毎年のように訪問していた。／同年6月に書いた『歎願状』と題した便箋5枚が残っている。沖繩県民や当時の大田昌秀知事にあてたものだ。『日米首脳会談以来歴史に対して負っている私の重い「結果責任」を執り、武士道の精神に則って、国立沖繩戦没者墓苑において自殺します』。『自殺』は自決を意味する。』

『沖繩に殉じた男』？

この記事の直後『週刊朝日』には『密約』検証結果外伝 若泉敬―知られざる『密使』の苦悩』という記事が上下二回にわたって掲載された（2010年3月19日、26日号）。

それには、こうある。「96年に命を絶った国際政治学者若泉敬。その長男が初めて口を開き、友人からの書簡も明らかになった。『沖繩に殉じた男』の足跡と心中に迫る」。

私は自責の念の根柢（自殺の動機）への強い関心からこの記事を読んだ。そこには最後までやりとりした友人池田富士夫の自殺へ向かう若泉への以下のような手紙が紹介されていた。

『沖繩に殉ずる。そう決断を下した理由は、沖繩百万の同胞の真の期待を裏切って、有事

核の再持込みの日米両首脳の密約成立に加担したと言う、若泉の潔癖なまでの責任感である。沖繩百万の同胞は、現に生存し、米軍の大軍事基地の中にあつて、戦後五十年を経た今日、いまだに苦難の生活を強いられている。そして若泉が裏切つた人々とは現存の沖繩県民であつて、被災して亡くなつた一般住民の九万人、或いは日米両軍を合せての二十一万の戦死者・戦没者ではない筈である。／向き合うべきは沖繩戦の犠牲者ではなく、いま米軍基地に苦しむ人々ではないか、と問いかけたのだ。

彼の動機について、ひどく釈然としない気分を私もかかえた。記事を読みおえ手元にはありパラパラと読まないではなかつた『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』（以下『他策』）をこの際キチンと精読してみようと思つた。

痛々しい論理的錯乱



ただ、若泉が『他策』をまとめている過程に協力者として関わつた後藤乾一の『沖繩核密約』を背負つて『若泉敬の生涯』という本が出版されてもいたので、まずそちらの方を読んでみた。

後藤の本は、アメリカのロストウ・キッシンジャー人脈と交流した、戦後のニューライトの知識人への精密で愛情のこもつた評伝の力作であつた。ゆえに、非常に興味深く読めた。しかし、なぜ沖繩戦の死者たちにまでまとめて彼が自責の念をもつたのか、という疑問は、後藤にとつてもまったく論理的にとけるものではなかつたようだ。

『他策』をキチンと読んで、この自責の念の心情の論理的根拠はまったく不明。だいたい「核ぬき本土なみ」返還の実現のために「密約」をするのだと若泉は繰り返しているが、「核ぬき」でも「本土なみ」でもなくするための「密約」を結ぶ当事者の心情なのだから、これもまた、まったく理解不能である。

この飛び抜けて貴重な証言記録は、客観的事実の正確な記述に細かくこだわつた学者の、ナシヨナリズムの心情にふりまわされた論理的錯乱が、ひどく正直に書き残されている点は痛々しかつた。

思いがけない大発見

もう一点、ここで紹介した2冊の内容を重

ねて読み抜くことで、私は大変な発見をしたのである。若泉の本は、本人がキッシンジャーに核密約に引きづりこまれて、その気になつていくプロセスを正直に記録してみせている（本人は主観的にはそうは考えていないようだが）。その若泉がバレた時のことを考えて、密約をしぶつていく佐藤首相を引っぱつていくのだが、佐藤の最後の密約への決断を後押ししたのは天皇ヒロヒトであつたという事実が浮かび上がってくるのだ。訪米直前での佐藤の天皇への「上奏」、そしてアメリカの核の傘に入る必要は陛下の希望という、佐藤のアメリカでの発言。

さらに「密約」の継承は天皇がいる限りはだいじょうぶだという佐藤が若泉向かつて吐いた言葉。

沖繩を売り渡す「天皇メッセージ」を発し、米軍が日本を好き勝手に使用できるかたちでの安保条約をつくりだす独自の外交を展開した天皇ヒロヒト。すでに歴史の専門家によつてこの間明らかになされてきた事実。それをふまえて、これらの事実を解説すれば、米軍にしがみついて延命しようという天皇ヒロヒトの一貫する意思が、そこに読み取れるはずである。なんという男であろうか。思いがけない大発見であつた。

天野 恵一（あまの・やすかず、本誌編集委員）



ベトナム戦争の本質を衝く

「ハーツ・アンド・マインズ／ベトナム戦争の真実」（デジタル修復版）監督／ピーター・デイヴィス 製作／バート・シュナイダー、ピーター・デイヴィス 撮影／リチャード・ピアーズ 原題Hearts and Minds 1974年アメリカ映画 112分 第47回アカデミー賞最優秀長篇ドキュメンタリー賞受賞 日本初劇場公開（6月19日より、東京・恵比寿の東京都写真美術館ホールにて「ウィンター・ソルジャー／ベトナム帰還兵の告白」と併映）



教室の中の第3世界

「パリ20区、僕たちのクラス」監督／ローラン・カンテ 脚本／ローラン・カンテ、フランソワ・ベゴドー、ロバン・カンピヨ 撮影／ピエール・ミロン 出演／フランソワ・ベゴドーと24人の生徒たち 原題Entre les murs 2008年フランス映画 128分 第61回カンヌ国際映画祭パルムドール受賞作品 6月12日より岩波ホール(東京神保町)にて上映

- ◆ 終結して35年、すでに歴史の領域に入ったベトナム戦争の本質を知るには、「ハーツ・アンド・マインズ」は必見のドキュメンタリーだろう。今日見ると米国歴代大統領、国防長官、最高司令官の露骨な冷戦思考と、兵士から上層部まで一貫した東洋人に対する人種偏見が、とりわけ目立つ。「東洋では人口が多いから生命の値段が安くなる。生命は重要ではないのだ」というウエストモーランド司令官(当時)の発言の直後、肉親の死を嘆くベトナムの人びとの映像が痛烈だ。ここだけでなく、随所で生き延びるのに必死な民衆の表情が胸に突き刺さる。
- ◆ 世界最強・最先端の軍事力を投入しても米国が勝てなかったのはなぜか、その答はすべてこの映画にある。だが、終りに登場した元大尉の発言どおり、「アメリカ人は見えないようにしている」。今世紀になってまたも同様な戦争に突入した米国支配層は、自国が生んだこの秀作を未だに顧みようとしない。これだけの犠牲を払った歴史の教訓を無にする国の未来は、危うい。
- ◆ 併映の「ウィンター・ソルジャー／ベトナム帰還兵の告白」(製作・ウィンターフィルム)は、1971年の帰還兵たちによる米議会公聴会での証言集。家庭でのよき父親や息子が戦場で鬼畜のような行動をとることは、日中戦争でも、最近のイラク、アフガンでも改めて実証されたことを思う。
- ◆ 「パリ20区、僕たちのクラス」は、移民が多く住むパリ20区の公立中学校で、教師経験のある原作者と、大部分がアフリカ北部・中部からの移民の子供たち24人を中心に撮影された、活力に満ちた作品。子供たちの自然発生的としか思えない行動や発言を引き出した台本と演出がみごとだ。
- ◆ よくある学園ドラマのように、生徒たちの恋愛、非行、受験などのテーマを織り込んだ涙と笑いの物語ではない。カメラはほとんど学校の外には出ず、全体の4分の3は教室の授業風景。14〜15歳、生意気さかりの生徒たちを相手にする国語の授業は、息つく隙も見せられない真剣勝負だが、ベテラン教師のフランソワは、全人格をかけてぶつかって行く。子供たちのさまざまな、予想外の反応に、私たちは驚かされ、笑わされる。プラトンの「国家論」を読んだある生徒が、ソクラテスの思想を要約してみせる場面は、感動的でさえあった。教育が教師から生徒への一方通行でない学校での、教師と子供の幸せが感じられた。
- ◆ しかし、フランソワは一部の黒人生徒の反感を買い、授業を妨害した1人を懲罰委員会にかけることになる。退学処分となった生徒は、不法滞在で出身地マリ共和国へ。学校の外には厳しい南北格差が存在する。ヨーロッパはそれでも、第3世界の流入に何とか取り組もうと努力している。日本はいままで排除できるのか、その結果は？

本野 義雄(もとの・よしお、本誌編集委員)

4月8日読者懇談会の報告

自衛隊をどのよう に縮小するか

—前田哲男さんに聞く—

◆自衛隊に関係する「普天間基地問題」

普天間基地移設問題は、当面の重要課題だが、米軍再編と結びついて自衛隊をどうするかという問題と関係してくる。在日米軍は自衛隊と一体化し、共通の戦略目標で結ばれている。その象徴としてホットな形で普天間基地移設問題があり、全体構造を見る必要がある。72年まで沖縄には自衛隊はいなかった。まず航空自衛隊が移駐、その後、陸上自衛隊が移駐した。今年3月26日、沖縄の陸上自衛隊第一混成団が第15旅団に編成替えした。今、陸上自衛隊は師団を旅団にスリム化し、機動力を強めている。沖縄では混成団から旅団へと規模が大きくなった。自衛隊は、日本本土では戦闘を考えていないからだ。沖縄の自衛隊は先島諸島などの離島防衛や台湾海峡の防衛を担っている。

沖縄のキャンプ・ハンセンでは、陸上自衛隊の中央即応集団（警備地域を持たない特殊部隊）が在沖繩海兵隊と共に、市街地戦闘を想定した共同訓練を行なっている。海上自衛

隊も米第7艦隊と共同訓練をしている。

◆「火事場どろぼう」—「立川方式」

防衛省は米軍基地を自衛隊と共同使用したいのだ。自衛隊は違憲であるゆえに、土地収用法を使って基地用地を確保できない。米軍基地を借りて、そこに入り込み、米軍が撤退した後、自衛隊がそこを自衛隊基地にする。その例が、砂川闘争で有名な米軍立川基地だった。日米共同使用後、米軍が撤退し、現在の陸上自衛隊立川駐屯地になった。普天間基地の勝連半島移転案も、防衛省が自衛隊と米軍の共同使用を考えているのだ。まさに火事場ドロボウだ。

◆自衛隊をどうするか

江田、石橋らのビジョンを今の情勢の中で再評価しながら対抗構想を作る必要がある。自衛隊が違憲だから「即解体」では、何も言っていないのと同じだ。それは知的怠慢だ。自衛隊は50年の警察予備隊発足から今年で60年。大きな時代の変化の中にある。歴史の流れの中で確実に変わっていく。現政権は、防衛関係では前政権を引き継ぎ防衛費も事業仕分けの対象にもなっていないが、村山政権時代、防衛政策はかえって悪かった。村山政権時代の教訓を生かして民主党のなかの少なからぬ人々や社民党、共産党に対して世論を作りながら対抗構想を働きかけねばならない。

（質疑から）

●自衛隊内の教育は…

—阿久根市市長は防大出身だ。地方自治法が想定しない方法で、ピラを貼った職員を処分した。隊員教育がどうなのか知るべきだ。隊員へのいじめ、田母神問題などに対して文民統制や隊員の人権相談所の設置やヨーロッパにある兵士組合の制度化が必要だ。

●今、出来る対抗策は…

—ミサイル防衛や次期戦闘機など前政権を引き継いでいる。その行き足を止めること。装備武器の発注を止める、自衛官の新規採用を止める。そして、長期的な自衛隊の解消を考える。短期的には、①災害協力隊②国際協力隊③国土防衛隊の3分割だ。そして、渡洋能力が一切なく、F15戦闘機などの攻撃的装備武器をなくすことだ。自衛隊が非攻撃的であること、縮小しつつあることを近隣諸国に伝え、軍事中心から人間の安全保障へと、今、世界はEUやアセアンのように域内では不戦同盟のようになりつつあるのだ。

●最小限防衛力は違憲では？理想は絶対に欠かせない…

—憲法は自衛権を認めている。一切の防衛力の無い職能集団に自衛隊をしても様々な脅威の中で安全なのかという疑問が残る。これに答えなければならない。自衛権を表すには、市民がゼネストやサボタージュなどでそれを表し実行する運動が一方で必要だ。とにかく、やってみようではないか。

文責・有馬 保彦（ありまやすひこ、本誌編集委員）

【普天間基地問題についての第二の声明】

賛同署名 5月15日現在 3209筆
(開始：2010年4月23日 第一次集約：5月20日)

本声明に賛同される方は

<http://form1.fc2.com/form/?id=501657>

にて署名をお願いします。

なお、この賛同署名は総数公表とし、
個々のお名前は公開されません。

米海兵隊普天間飛行場は、住宅密集地の中にある世界でもっとも危険な基地として、すみやかな閉鎖、撤去が求められてきた。旧自民党政権は、普天間の移設先として、北部名護市の辺野古（キャンプ・シュワブ沿岸部）に代替基地を建設することを米国との間で「合意」したが、それは、沖縄の中に新たな巨大基地を建設することに他ならず、沖縄県民はあらゆる機会にそれに反対する意思を表明してきた。

2009年秋の政権交代と、民主党の「国外、最低でも県外（移設）」という選挙での訴えが、沖縄県民に希望を与え、状況を大きく変えた。2010年1月の名護市長選挙では、辺野古への移設に反対する稲嶺進候補が勝利した。2月には、これまで移設を容認してきた自民党、公明党を含め、沖縄県議会が全会一致で「普天間基地の県外移設」を求める意見書を採択した。また県内41市町村長全員が県外・国外を主張している。保守が擁立した仲井真弘多県知事も「県内（移設）は厳しい」と語り始めた。沖縄は、いまや、オール沖縄で「県内移設」反対を明確にしたのである。

しかし、2010年5月まで「決断」を送り出した鳩山政権は、県外移設の可能性を真剣に追求することなく、キャンプ・シュワブ陸上案や勝連半島沖埋め立て案など、「県内」を軸に決着することを図り、動き始めている。

私たちはこの政権の動きを深く憂慮し、以下のように声明する。（呼びかけ人のうち18人は、2010年1月に発表した本土の学者・知識人声明の呼びかけ人である。沖縄でもすでに学者・知識人による海兵隊撤収要求の共同声明が出されており、その意味でこれは合同での第二の声明ということになる）

(1) 私たちは、辺野古陸上案（キャンプ・シュワブ内）、勝連半島沖案はもちろん、すべて

の沖縄県内移設に反対する。これ以上沖縄に過重な負担をかけてはならない。沖縄の意思を無視してはならない。沖縄の環境を破壊してはならない。

(2) 民主党は、衆議院選挙で「国外、最低でも県外」を訴えた。また名護市長選では、辺野古移設反対を主張する稲嶺進候補を推薦し、勝利させた。鳩山政権が、県内移設で決着させるならば、それは明確な公約違反であり、国民・県民への裏切りといわなければならぬ。鳩山政権は、仮に現在の日米安保体制を前提にするとしても、まず県外移設の可能性を徹底して追求すべきである。

(3) 県外でも県内でも移設を受け入れる地域がなかった場合、現在の普天間飛行場をそのまま継続使用するという案が出ているが、それは許されない。周辺住民の生命と暮らしを脅かしているこの危険な基地は、すみやかに閉鎖されなければならない。

(4) 県外移設を追求した結果、どの地域も受け入れないということならば、日本国民には海兵隊の基地を受け入れる意思がないということの意味する。必然的に米海兵隊は日本から全面的に撤収する以外にない。日本国民には、米海兵隊の存在なしに、東ア

アジア地域の平和と安定を構築する積極的な役割を果たす意思があるというところである。米国は、日本国民の意思を尊重しなければならぬ。

(5) そもそも政権が奔走し、メディアが関心を集中させたのは、「基地用地」探しばかりであった。いま考えるべきことは、本当にそのようなことなのだろうか。むしろ冷戦時代の思考法である「抑止力」とか「敵」とか「同盟」といった発想そのものを疑い、その呪縛から逃れることが必要なのではないか。国際社会に「共通の安全保障」や「人間の安全保障」といった考え方が現れ、冷戦の敵対構造を解体していく大きな力になった。私たちは、米軍基地の代替地をタライ回しのように探すのでなく、米軍基地を沖縄・本土に存在させ、米軍に勝手気ままに使用させている構造こそを問わなければならぬ。日米安保条約は、冷戦時代の遺物であり、いまこそ、日米地位協定、ガイドライン（日米防衛協力の指針）などを含めて、日米安保体制を根幹から見直していく最大のチャンスである。その作業を開始することを、日本政府、そして日本国民に訴える。

〈呼びかけ人〉

- 宇沢弘文（東京大学名誉教授） 遠藤誠治（成蹊大学教授） 岡本厚（岩波書店「世界」編集長）
 加茂利男（立命館大学教授） 川瀬光義（京都府立大学教授） 古関彰一（獨協大学教授） 小林正弥（千葉大学教授） 小森陽一（東京大学教授） 千葉眞（国際基督教大学教授） 寺西俊一（二橋大学教授）
 西川潤（早稲田大学名誉教授） 西谷修（東京外国語大学教授） 原科幸彦（東京工業大学教授） 前田哲男（評論家） 水島朝穂（早稲田大学教授）
 宮本憲一（大阪市立大学・滋賀大学名誉教授） 山口二郎（北海道大学教授） 和田春樹（東京大学名誉教授） 新崎盛暉（沖縄大学名誉教授） 大城立裕（作家） 大田昌秀（元沖縄県知事） 我部政明（琉球大学教授） 桜井国俊（沖縄大学教授） 島袋純（琉球大学教授） 新城郁夫（琉球大学教授）
 高里鈴代（基地・軍隊を許さない行動する女たちの会）
 高良鉄美（琉球大学教授） 高良勉（詩人、批評家） 照屋寛之（沖縄国際大学教授） 富川盛武（沖縄国際大学教授） 仲里効（メディア工作者） 仲地博（沖縄大学教授） 比屋根照夫（琉球大学名誉教授）
 三木健（ジャーナリスト） 宮里昭也（ジャーナリスト） 宮里政玄（沖縄対外問題研究会代表） 山城紀子（ジャーナリスト） 由井晶子（ジャーナリスト）

6月読者懇談会のご案内

6月の読者懇談会は、本誌21ページにご登場いただいた小林アツシ氏をお迎えして、DVD「どうする安保」の上映と意見交換を行います。国の安全保障とは？日米安保条約の実体とは？核を含む米軍勢力の傘に自らの安全を委ね、基地の負担は沖縄へ押しつけている「国民」の本音とは？「安保」に正面から向き合つことが求められています。大勢のご参加をお待ちしています。



- 日時：6月25日（金）午後6時半～8時半
- 場所：ピーブルズ・プラン研究所（東京都文京区関口1-44-3 信正堂ビル2F）
- TEL：03-6424-5748
- 参加費：500円

読者のために

◆30年前 私の原点

大阪府大阪市 菱木康夫
中川六平さんの「ほびつと 戦争をとめた喫茶店」を読みました。「べ平連1970—1975」とあるので私が大学2年の1972年に同志社べ平連に参加した時とダブっているのですが長新太さんのホビットのマッチをもらったことぐらいしか記憶は思い出せません。私の原点はここにあると思います。30年以上前ですね。

◆米軍は10年で無くす

大阪府枚方市 木下良夫
米軍撤退5年以内で半減、10年で無くす。

◆今に活きる伊達判決

福岡県福岡市 脇 義重
島田清作さんの論考(注)に賛同します。伊達判決は私の中学生直前のころのこと。学校の先生から聞き知った。しかも中学校高校の6年間、聞き続けた裁判で平賀書簡など刻心の思い出。今に活きる判決と感謝しています。(編集部注・本誌117号の「伊達判決を生かし日米安保を破棄しよう」)

◆77歳です

兵庫県加古川市 西山敏和
小生77歳。いつも御誌に励まされております。

◆元気を

東京都杉並区 道津弘二
会報を読んですばらしい時間を共有し元気を感じています。

◆安川寿之輔さんに我が意を得た

愛知県岡崎市 大久保敏明
私は賀状にこんな戯れ言を書いた。「ノーベル平和賞って何をした人が貰うんだい？ 米大統領や日本の元首相を見ればわかるだろ？ 二枚舌さー」だから「的外れの平和賞授与の意外性は、日本人にとっては『核密約』の佐藤元首相のブラックユーモアの受賞で経歴済み」(オバマ大統領のノーベル平和賞受賞演説批判)の中(注)という安川寿之輔氏の指摘に我が意を得たりの思いを強くした。(編集部注・本誌118号に掲載の論文)

◆他では無い情報がある

兵庫県姫路市 中村雅子
ニュースの全てに目を通すことはできませんがほかでは得られない貴重な情報があります。たいです。

◆ありがとう

東京都世田谷区 土井伸一郎
事務局、ボランティアの方々、いつもありがとう。

◆内容がわかりやすい

神奈川県横須賀市 照井敏子
「市民の意見」118号読みました。わかりやすく内容が深い点で日本一ですね。大いに目を開かされます。

◆米国に追従はやめろ

神奈川県川崎市 大崎六郎
普天間基地の移転で政府が迷走しているが、冷戦時の思想をいつまで引き摺っているのか。基地は米軍の要求によるものということを新しく発足した民主党が今一度再考すべきだ。米国に追従するのはやめろと言いたい。何時まで米国の顔色を窺っているのだ。

◆意見広告に参加しています

愛知県新城市 丸山俊治
年賀状にこの運動(注)に参加していることを書きました。5月3日にこの広告がなくて、絶対にダメです。(編集部注・市民意見広告運動)

◆寄稿いたします

北海道江別市 川端順造
1931年、満州事変が起きた年の1月3

日に生まれました。79歳になります。「英国冬の旅」(岩波ブックサービスセンター)の著者です。「君が代」問題の会に入っていますのでそのうち寄稿させていただきます。

◆ともに戦いましょう

埼玉原羽生市 峯 三男
毎号楽しみにしています。ともに戦いましょう。

◆全国の人たちに

福岡県久留米市 東 真喜子
全国のお仲間の人たちに励まされています。

◆排外主義を問う

東京都練馬区 草場 純
119号の柏崎さんの文(注)は面白かった。今、排外主義を排外するのは、一つの問いだろう。(編集部注・本誌119号の「在特会に抗して」)

◆目覚め続けること

兵庫県龍野市 南枝尚美
自身の内にあるいつも正当化し続ける思いに目覚め続けなければ争いは無くならないと思っこのころです。

◆沖縄の記事、ありがとう

長崎県長崎市 伊藤淑子

沖縄の記事ありがとうございます。辺野古を4年前に訪ねる前はドイツのように国が分断されなかったことを無神経に幸いと思つていた私です。74歳。

◆NPT期待します

京都府京田辺市 藤田晴子
いつもお世話になり有難うございます。5月に開かれるNPT再検討会議で良き結論が出る様に、そして核保有国が努力することを願います。

◆生存権の根幹

三重県鈴鹿市 元木ちえ子
「殺すな」は生存権の根幹だと思います。

◆活用しています

千葉県野田市 富村友子
お世話になります。会報の充実した内容に感謝しつつ活用させて頂いております。

◆鳩山さんへ

兵庫県川西市 幸野道雄
基地は減らそう、無くそう。普天間、今が正念場。鳩山さん、国民は県外、国外でないと納得しませんよ。

◆忘れない平和を希求する気持ち

愛知県知多市 坂野二三

この5月で66歳です。会の中では若い方なのでは。なのにこの頃物忘れが多くなりました。しかし平和を希求する気持ちを忘れることはありません。

◆心打たれます

東京都国立市 澤登千恵子
貴重な「市民の意見」誌、心打たれながらお読みしています。編集のみな様ありがとうございます。

◆メディアの異常さに抗しよう

愛知県名古屋市長屋市 江口政孝
「沖繩県内か県外」…基地についての報道はこれがほぼ100%と、という主要マスコミの現状。アメリカ基地などもういらぬという当たり前の主張・考えを全くといっていいほど無視する今の多くのメディアの異常さを心からなげくものです。少しずつ私たちの声を広げていきましょう。

◆「魚と漁師」、注文します

埼玉県新座市 島 和子
ハワード・ジンさんが亡くなられ残念です。「魚と漁師」早速、注文して読みたいと思います。

「読者のおたより」の多くは、会員登録の際の郵便振替票に書かれているメッセージを使わせていただいています。掲載について匿名をご希望の方は、その旨明記していただくと幸いです。

市民意見広告運動事務局から

佐藤 光子

5月3日の読売新聞、西日本新聞に、「基地はいらない」「核の傘もいらない」「人間らしく生きたい」「9条・25条実現」の意見広告を掲載することが出来ました。

長引く不況にもかかわらず、貴重な賛同金を、繰り返しお振り込みくださった全国の皆さま、意見広告を紙面に掲載するために連日の作業を続けたボランティアの方々、今年もすばらしいデザインを無償で提供してくださったデザイナーの鈴木一誌さん、村上和さんに心より感謝申し上げます。

鳩山政権が「沖繩の基地は最低でも県外に」と明言した事を受けて、沖繩を初めとして全国が「基地移設問題」で盛り上がりました。首相自身が期限をきった5月末も



間近なため、スローガン、デザインとも「沖繩」に絞りました。

これは、いつのまにか「日米同盟」などと言われるようになった「日米安保条約」のために、長い年月、犠牲を強いられていた沖繩の地から基地をなくそうとする闘いに連帯するためです。

また、今年も地方紙を西日本新聞としましたが、これは昨年が北海道だったので、今回は南としたことと、基地移設の候補地に九州の各地が挙げられていたことによるものです。

5月3日から連日、広告掲載についてのご感想、ご意見、ご批判をいただきましたが、全部で電話32件、メール・FAXが55件、ハガキ封書が4件でした。

反響の詳細については、読売新聞社、西日本新聞社のモニター調査結果を含め別途報告させていただきます。

ご支援、ご賛同ありがとうございました。
(なつう・みつこ、意見広告運動事務局)

「ニュースのCD・ROM化」試作版ができました

橋本 保彦

現在「試作版」の動作テストと不具合な箇所の修正と改善を進めています。

前号では発売時期を5月3日の予定とお知らせしましたが、不具合の修正と改善に時間が必要なため発売期日を延期し、次号で改めてお知らせしたいと思います。

今回は現在の「試作版」の中身をご紹介します。

CD・ROMにはデータとして、創刊号から100号までニュースの全頁と総ての記事の索引5107件が収録されています。

CD・ROMをパソコンに挿入すると自動的に、メニュー「ニュースの号数の選択」と「記事の索引」が表示されます。

メニュー「ニュースの号数の選択」では「号数」を選んで、ニュースを読むことができます。『記事の索引』では「記事」を選んでニュースを読むことができます。
メニューとは別に記事をキー

ワードで検索する「記事の検索」も用意しました。

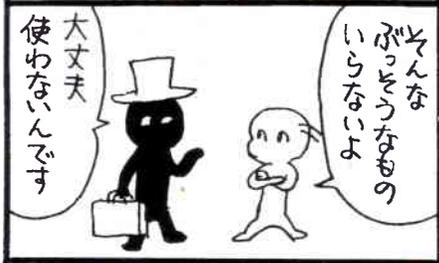
試しに「小田実」さんを、キーワードに検索してみると、38件の記事がリストアップされました。

リストのトップは、『殺し、殺され、焼かれ』の繰り返しを断ち切る仕事(ニュース99号)でした。ここでリストをクリックすると「小田実さん」の記事を読むことができます。

こうした内容の「試作版」の修正改善進めていますので、いまま少し完成までお待ち下さい。
(はしもと・やすひこ、本会員)



ふしぎの国のあいか by 藤川武男



2010.4.5.10PM*

Information

【東京】☆6月5日(土)講演会「日米安保条約に代わるもの、私たちがつくる平和のぞむ社会」13時30分～ 講師：梅林宏道 場所：千駄ヶ谷区民会館 (JR「原宿駅」徒歩7分) 参加費800円 主催：ふえみん婦人民主クラブ 電話03-3402-3244

☆6月15日(火)集会「2010年、60年安保闘争50年・声なき声50年」6・15集会 18時～ 場所：豊島区勤労福祉会館大会議室 主催：声なき声の会

☆6月15日(火)国会南門前で樺美智子さんに献花
 ☆6月16日(水)池澤夏樹・吉川勇一講演会「『60年安保闘争』50年・ベトナム解放35年」18時30分～ 場所：千駄ヶ谷区民会館 (JR「原宿駅」徒歩7分) 資料代800円 主催：市民の意見30の会・東京 電話03-3432-0155

☆6月19日(土)井上ひさしさんの志を受け継いで「九条の会講演会」- [日米安保の50年と憲法9条] 講演：大江健三郎、奥平康弘、澤地久枝他 場所：日比谷公会堂 (地下鉄丸ノ内線。千代田線「霞が関駅」徒歩5分) 参加費：1000円 主催：九条の会 電話03-3221-5075

☆6月15日(火)「ペシャワール会 中村哲医師講演会—アフガンに命の水を」18時30分～ 講演：中村哲 場所：大田区民ホールアブリコ大ホール (JR「蒲田駅」東口徒歩3分) 参加費：1200円 (前売り1000円) 主催：大田九条の会 電話03-3736-1141

☆6月19日(土)「60年安保闘争から50年—もうやめよう！日米安保条約」講演：浅井基文 報告：安次富浩 場所：社会文化会館 (三宅坂ホール 地下鉄丸ノ内線・千代田線「永田町駅」徒歩5分) 主催：2010安保連絡会 電話03-5275-5989

☆6月19日(土)「『韓国併合』100年と教科書問題」13時30分～ 講師：姜徳相 場所：杉並区立産業商工会館 (JR「阿佐ヶ谷駅」徒歩5分) 主催：「韓国併合」100年と教科書問題を考える実行委員会 電話090-9975-9356 (小島)

☆6月26日(土)「『ほうせんかの夕べ』関東大震災韓国・朝鮮人殉職者追悼碑建立記念チャリティーコンサート」15時開演 場所：曳舟文化センターホール 入場料：一般3000円 主催：「ほうせんかの夕べ」実行委員会 電話03-3614-8372

☆7月3日(土)講座「環境という問題—経済・文明・ライフスタイル」14時～ 発言者：古沢広祐 場所：ピープルズ・プラン研究所 (地下鉄有楽町線「江戸川橋駅」1-b出口 徒歩5分) 会費1000円 主催：ピープルズ・プラン研究所 電話03-6424-5748

【埼玉】☆開催中～7月10日「OKINAWA—つなぎとめる記憶のために」丸木夫妻《沖縄戦の図》他、展示 場所：原爆の図丸木美術館 (東武東上線「森林公園駅」「高坂駅」下車) 市内循環バス唐木コース 入館料：大人900円、中高生600円、小学生400円 電話0493-22-3266

【神奈川】☆開催中～6月6日「城山三郎展—昭和の旅人」場所：神奈川近代文学館 (みなとみらい線「元町・中華街駅」徒歩8分) 電話045-622-6666

▼表紙絵の作者▲



藤川 武男 (ふじかわ たけお)

1907年5月16日、香川県三豊郡上高野村に生れる。県立三豊中学校卒業。26年4月、東京美術学校日本画科に入学。卒業後、香蘭詩社に入り、36年、同人となる。38年6月、月刊誌「手芸と洋裁」を発行。42年11月、藤川東瑛の俳号で、歌集『深音』を発行。44年10月27日、妻と2児をのこし、中国・湖南省の東安に出征。45年11月16日、戦病死。享年38歳。

発送作業・デモなどのこと

吉川 勇一

■写真は、本会事務所の前号の『市民の意見』発送の作業をしている一場面です。13人写っています。まだ外の廊下で荷造りをしている人2人がいて、それにカメラを持っている私がいまから、全16人です。3月31日のことで、桜もストロップしているような変な気候の寒い日でしたが、これだけの人数ですと、狭い事務所は暖房も要らず熱気でした。数年前は、発送作業といえは時間がかり、車に



積み込んで郵便局まで持ち込むには、零時を回ってしまふのでした。今は、配達業者が集めに来ますし、これだけのボランティアの方々の方々の仕事ですと、えらく早く終わります。

この日は何と8時半で終わりました。いろいろな情報や面白い話もやりとりされます。隔月末のことですが、一度事務所へお寄りくださいませ。

■5月3日は、意見広告が出た日。事務所は、新聞読者の反応の意見や、賛同者からの問い合わせなどで、電話はひっきりなしでした。午後は、意見広告運動スタッフや30の会のメンバーが、日比谷公会堂での憲法集会で、意見広告の載った新聞のコピーを数千枚も配り、そのあと銀座へのデモでした。しかし、今年は人数もあまり多くなかったな、と参加者から意見が出されていました。(私も不参加です！)

■今年、意見広告は『読売新聞』全国版と『西日本新聞』(福岡市に本社、九州などに読者)に出されました。『読売』は、3月末の世論調査では、憲法改定意見が43%、反対が42%で、まだ1ポイントだけ改憲派が多いものの、昨年と比較して「反対」が6ポイント増、「賛成」は9ポイント減だとのことですから、憲法改悪派には大きい後退でした。この意見広告で、そうした動きがさらに進むように期待しています。

■『西日本新聞』では、同日号に「活かそう九条 羽ばたけ、世界へ」という「戦争への道を許さない福岡県フォーラム」の地元グループによる全面広告が出されていました。さらに、一昨年から私たちと友誼関係で始め

られた「とめよう改憲—大阪意見広告運動」は、同じ日、『毎日新聞』の大阪本社版(140万部発行)で、「守ろう活かそう! 憲法9条」という5段の意見広告が出されました。他はまだ調べていませんが、こうした改憲阻止の意見広告が各地に広がることも希望しています。

■前号で6月16日(水)の池澤夏樹さんの講演のことに触れました。5月7日の事務局会議は、その集会のチラシ作成や当日の準備などの相談でした。それ以外に、本誌の執筆者へのお礼についての相談もありました。本誌への論文やルポなどの執筆には、会への賛同・ご協力ということで執筆料なしでした。これからも似たようなものですが、一応、論文やルポなどのご原稿をお願いするには、お礼の「お気持ち」として、「図書カード」(2千円)をお贈りすることにいたしました。いずれ、「殺すな」マークの入った会独自の「図書カード」を作りたいなども思っています。

■前号と一緒に、鶴見俊輔さんの超3時間のロングインタビューDVD『鶴見俊輔みずから語る』(¥3150、〒1500001 東京都渋谷区神宮前5357コスモス青山Sumitomo棟テレビマンユニオン FAX:036418747)の紹介のチラシを含めました。うち、お2人の注文FAXが裏返しなどで読めず、発送できないそうです。注文したのに届いていない方は、もう一度ご連絡をとのこと。よろしく。(10/05/10記)

(よしかわ・ゆういち、事務局、編集委員)

市民の意見 30 の会・東京 2010年3月～4月会計

(単位：円)

1. 取 入	1,219,809	2. 支 出	852,519
一般会費	291,000	発送費	156,355
協力会費	102,500	通信費	34,388
敬老会費	244,500	消耗品費	14,665
障害者会費	17,000	編集費	12,329
(会費小計)	655,000	会場費	2,000
カンパ	93,500	交通費	70,740
ニュース販売	10,920	事務所費	110,000
バッジ等販売	1,680	光熱費	8,527
銀行利息	784	手数料	60,385
集会入場料(*1)	51,400	諸会費(*2)	7,000
雑収入	15,000	雑費	1,715
預り金	232,500	講演会費(*3)	93,650
立替金精算	159,025	立替金	127,265
		預り金精算	153,500
		3. 取 支	367,290
		4. 次期へ繰越	9,120,323
		会基本会計	6,011,587
		条約基金	176,715
		F/I基金	2,665,820
		預り金	266,201

注 (*1) 2/20講演会収入¥46,400、読者懇談会¥5,000。(*2) 2010安保連絡会カンパ¥6,000、イラク戦争の検証を求める会¥1,000。(*3) 講演会分担金会場費¥15,000、講師謝礼¥30,000、講師宿泊費・交通費¥30,000、チラシ印刷費等諸雑費。なお、ニュース119号の印刷費(¥242,141)の支払いは、今期には間に合いませんでしたので次期に繰越します。

近ごろ、食の安全と家計の安心を狙った家庭菜園ならぬベランダ菜園が流行りだとか。私も挑戦することにしたのですが、プランター、土、苗などあれこれ欲張って買い込みとんだ大出費に！…果して、これで家計の安心は達成できるのでしょうか？

さて、今期会計の中で目立った出費としては、2月20日に開催した講演会の諸費用で、参加費収入と差引きしても持ち出しとなってしまいました(毎回

のことですが)。

しかし、収支全体では黒字となっています。今期会計に計上出来なかった前号ニュースの印刷費を差し引いてもわずかに黒字となります。

今のところ会の運営は、経済的には順調に推移しており、編集担当者も安心してニュース作りに励むことが出来ております。

これもひとえに会員の皆様の宣伝活動とカンパのおかげです。ありがとうございました。(上口)

(ご注意)

- ・この用紙は、機械で処理しますので、金額を記入する際は、枠内にはっきりと記入してください。また、本票を汚したり、折り曲げたりしないでください。
- ・この用紙は、ゆうちょ銀行又は郵便局の払込機能付ATMでもご利用いただけます。
- ・この払込書をゆうちょ銀行又は郵便局の渉外員にお預けになるときは、引換えに預り証等を必ずお受け取りください。
- ・この用紙による払込料金は、ご依頼様が負担することとなります。
- ・ご依頼様からご提出いただきました払込書に記載されたおとところ、おなまえ等は、加入者様に通知されます。
- ・この受領証は、払込みの証拠となるものですから大切に保管してください。



この場所には、何も記載しないでください。

編集後記

◆今年も市民意見広告運動の仲間が、「基地はいらない」の見出しのついた読売、西日本新聞に掲載された抜き刷りを、同日の5月3日、日比谷公会堂の憲法集会で参加者に配りました。仲間一人は5人ほどの人から、「基地はいらんじゃないの」と言われたとか。

◆護憲集会に参加する人でもそうなんだ：これが「現実」とはいえ、ずっと引っかかっています。

◆編集後記に書くのもなんですが、野澤さん編集お疲れさま。次号もよろしくです。(吉田)

◆迷走する鳩山政権に対して、事務局メンバーの反応は意外なほど冷静です。声高に非難したり、むやみに擁護することもなく、とにかく今は基地をなくすために行動するのみと、思い思いにデモや集会、署名活動などに走り回っています。

◆しかし「(海兵隊について)考えが浅かったと言われればその通りかもしれない」などと一国の首相に言われると、さすがに声を失う思いです。

◆合わせて一人前の2人が何とか今号の編集を担当しましたが、慢性的なス

タッフ不足は相変わらずです。会員のみなさん、ぜひお気軽に事務局へ！
(野澤)

◆編集委員 天野恵一、阿部めぐみ、有馬保彦、杉内蘭子、高橋武智、高岡甫雅、西田和子、野澤信一(今号担当)、道場親信、本野義雄、諸橋泰樹、吉川勇一、吉田和雄(今号担当)

◆訃報 会員のご逝去の報をご遺族から頂きました。

ばばこういちさん(東京都)
清水知久さん(東京都)
平岡 真さん(静岡県)
石原美千代さん(静岡県)
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

今号は5月3日付読売・西日本新聞掲載の市民意見広告のご賛同者にも意見広告運動事務局のご了解を得てお届けしています。本誌『市民の意見』ご購入の新規お申込み及び継続購読の年間紙代、意見広告賛同金、運動へのカンパ、その他グッズ等のお支払には、下の郵便局振込取扱票を切り取ってご利用下さい。

振替払込請求書兼受領証

口座記号番号	00120-9
	359506
加入者名	市民の意見30の会
金額	千 百 十 万 千 百 十 円
おなまえ	
ご依頼人	様
料	消費税込
金	日 附 印
備	
考	

記載事項を訂正した場合は、その箇所に訂正印を押してください。切り取らないでください。

00 東京 払込取扱票

口座記号番号	00120-9	金額	千 百 十 万 千 百 十 円
	359506	料金	備考
加入者名	市民の意見30の会		
通	①普通会員(¥2,500/年) 円 ②協力会員(¥5,000/年) 円 ③シルバー会員他(¥2,000/年) 円 ④意見広告賛同金 円 ⑤運動へのカンパその他 円 氏名公表 可・不可 どちらかに○を		
信	領収書 要・不要		
欄	(通信欄)		
払込人住所氏名	*ご住所 〒	日	附
	お名前(ふりがな)	印	
	(電話番号)		

裏面の注意事項をお読みください。(ゆうちょ銀行)
これより下部には何も記入しないでください。